

日 本 体 育 学 会

体育心理学専門分科会会報

第 19 号 (通卷第 47 号)

体育心理学専門分科会

2008 年 2 月発行

日本体育学会体育心理学専門分科会会則

- 第1条 本会は、日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員の出選は、次の方法で行う。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事をもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の出選
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。
- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. この会則は、平成14年10月13日から施行する。

体育心理学専門分科会の役員（敬称略）

任 期：平成19年4月1日～平成21年3月31日

会 長：猪俣 公宏

理事長：吉川 政夫

理 事：学会大会委員会（○中込 四郎，荒木 雅信，土屋 裕睦）

企画委員会（○石井 源信，伊藤 政展，鈴木 壮）

広報委員会（○吉田 茂，佐久間 春夫，竹中 晃二）

庶務・会計委員会（○谷口 幸一，高妻 容一）

○：委員長

監 事：栗木 一博，高見 和至

幹 事：松本 秀夫

日本体育学会体育心理学専門分科会会則

- 第1条 本会は、日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行う。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員を選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会計年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。

- 附則 1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定する。
2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
3. この会則は、平成14年10月13日から施行する。

体育心理学専門分科会の役員（敬称略）

任 期：平成19年4月1日～平成21年3月31日

会 長：猪俣 公宏

理事長：吉川 政夫

理 事：学会大会委員会（○中込 四郎，荒木 雅信，土屋 裕睦）

企画委員会（○石井 源信，伊藤 政展，鈴木 壮）

広報委員会（○吉田 茂，佐久間 春夫，竹中 晃二）

庶務・会計委員会（○谷口 幸一，高妻 容一）

○：委員長

監 事：栗木 一博，高見 和至

幹 事：松本 秀夫

巻頭言

「曲がり角」

体育心理学専門分科会会長 猪俣 公宏（中京大学）

本分科会会員の方の中にはこのタイトルを記憶されている方も多いことでしょう。このタイトルは本分科会の初代会長の松井三雄先生が体育心理分科会の会報につけられた名称である。おそらく、この名称付与の背景には松井先生の体育心理学に対する基本的な考え方や思いがあったのだろう。当時とは体育・スポーツを取り巻く社会状況も大きく変化し、またそれに伴って、体育・スポーツに関わる研究に対する社会的要請も変化してきている。応用科学としての体育心理学分野においては常にこのような要請に耳を傾け、提起された問題解決に向けた努力を積み重ねていくことが一つの使命であるといえよう。

このように見てくると、われわれは常に曲がり角に立っている自覚を持ちながら、過去の積み重ねを展望しつつ、未来に向けて、新たな方向を模索していかなければならないのではないだろうか。

そこで現時点における曲がり角に立って過去に歩んできた足跡と未来への道筋を考えてみると、まず、母体である体育学会は発足当時に比して会員数も増大し、さらに分科会の数も増え、各領域の専門化が進むとともに各分科会の独立性が高まり、各分科会は体育学会とは別の関連学会組織を持つようになってきている。これは一つの研究分野の発展がたどる必然的な結果であるとも考えられる。そこで、重要な視点はこれらの分化し、専門化した領域をいかに再統合し、応用科学としての使命である体育における問題解決を目指していくかということではないだろうか。そのために体育心理学専門分科会に課せられていることとしてはまず、学会シンポジウムや共同研究などを通して、他の専門分科会との積極的な交流を推進していくこと、また専門領域においては伝統的な心理学的方法論にとらわれず、学際的な方法論を積極的に受け入れていくこと、さらにまた新たな研究問題へ挑戦していくことなどが挙げられよう。会員の方々にはこのような視点から、学会における他の専門分科会との共同シンポジウムの企画や、他領域の専門家との共同研究の推進、さらには従来の専門分科会には見られなかった研究課題の開拓などに積極的に取り組んでいただくことを期待したい。

また国際交流の流れの中で、従来の主に海外からの情報を受ける側から、われわれの研究情報を積極的に発信していく側に変えていく努力を地道に積み重ねていくことが必要ではないだろうか。幸いなことに、昨今、体育系の大学や専門学部は増設されてきており、また体育・スポーツ心理学の領域における大学院教育も充実してきており、若手研究者も年々増加する傾向にある。ますます、高度なレベルの研究の発展が期待できそうである。体育心理学専門分科会がこのような発展の支えになるよう精一杯努力していきたい。

体育心理学専門分科会会報第19号

目次

巻頭言...「曲がり角」	猪俣 公宏 (中京大学)	i
目次.....		iii
I. 特別寄稿		
私の研究の視点と独創性 橋本 公雄 (九州大学健康科学センター)		3
II. 日本体育学会第57回大会関連		
1. プレセミナー		
テーマ：動いている人間の中身を知ること (志向分析) 司 会：阿江 美恵子 (東京女子体育大学) 演 者：佐藤 徹 (北海道教育大学) 指定討論者：粟木 一博 (仙台大学)		
プレセミナー演者報告.....	佐藤 徹 (北海道教育大学)	11
プレセミナー傍聴記.....	豊田 則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)	13
2. キーノートレクチャー1		
テーマ：身体障害者の自己の再構築に果たす運動・スポーツの役割 司 会：吉川 政夫 (東海大学) 演 者：内田 若希 (九州大学大学院芸術工学研究院 ・日本学術振興会特別研究員)		
演者報告.....	内田 若希 (九州大学大学院芸術工学研究院 ・日本学術振興会特別研究員)	14
傍聴記.....	高井 和夫 (文教大学)	16
3. キーノートレクチャー2		
テーマ：スポーツ選手が語りそして表現する「身体」の治療的意味 司 会：井上 則子 (津田塾大学) 演 者：中込 四郎 (筑波大学)		
傍聴記.....	立谷 泰久 (国立スポーツ科学センター)	17
4. シンポジウム		
テーマ：体育・スポーツ・健康教育におけるポジティブサイコロジーの視点 司 会：橋本 公雄 (九州大学健康科学センター) 演 者：堤 俊彦 (近畿福祉大学)		

健康心理学の視点からみたポジティブサイコロジー
 小橋川 久光 (琉球大学名誉教授)
 体育・スポーツ領域におけるフロー研究の立場から
 宮城 政也 (沖縄県立看護大学)
 ヘルスプロモーションにおける楽観主義の視点について

司会報告.....	橋本 公雄 (九州大学健康科学センター)	18
演者報告.....	宮城 政也 (沖縄県立看護大学)	19
傍聴記.....	相馬 幸樹 (大阪体育大学大学院)	20

5. 口頭発表

座長報告

筒井 清次郎 (愛知教育大学)	21
栗木 一博 (仙台大学)	22
杉山 佳生 (九州大学)	23
口頭発表記	
西田 順一 (九州大学大学院人間環境学研究院)	24
口頭発表傍聴記	
鶴原 清志 (三重大学)	25

6. ポスター発表

ポスター発表記

山田 秀樹 (北海道東海大学)	26
佐藤 秀明 (日本大学)	27
ポスター発表傍聴記	
松井 幸太 (筑波大学大学院)	28

III. 研究会の活動報告

スポーツ動機づけ研究会活動報告

杉山 哲司 (日本女子大学)	31
----------------	----

スポーツ社会心理学研究会活動報告

三木 ひろみ (筑波大学)	32
---------------	----

臨床スポーツ心理研究会活動報告

伊藤 友記 (九州共立大学)	33
----------------	----

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会活動報告

高妻 容一 (東海大学)	34
--------------	----

運動学習研究会活動報告

増澤 卓也 (筑波大学大学院)	35
-----------------	----

IV. 研究室紹介

びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ心理学実験室

豊田 則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)	39
---------------------	----

V. 学位論文紹介

スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす 行動的・生理的・心理的影響とその教育的試み 藤野 良孝（独立行政法人メディア教育開発センター）	43
舞踊における動きの質的变化に伴うボディ・イメージの変化 ー舞踊セルフ・エフィカシーの役割ー 清水 知恵（福岡教育大学）	46
競技者の良好な心理的状态に関する研究 ーFlow の概念を中心としてー 杉山 卓也（中京大学）	51
太極拳に関する精神生理学的研究 ー「調心」・「調息」・「調身」についてー 王 国譜（中国・同济大学）	54

VI. 海外情報

ライデン大学滞在記 清水 安夫（桜美林大学健康福祉学群）	61
---------------------------------------	----

VII. 事務局報告

平成18年度事業報告.....	67
平成18年度体育心理学専門分科会総会・理事会議事録.....	70
平成18年度決算報告.....	75
平成19年度予算案.....	76

I . 特別寄稿

私の研究の視点と独創性

橋本 公雄（九州大学健康科学センター）

1. はじめに

図1に9つの点（●印）を示しましたが、この9つの点(a)を一筆書きの4本の線で結んでみてください。たとえば、(b)のように引くと1つの点が残ってしまいます。しかし、9つの点に執着していたら、永遠に4本の線では結べないでしょう。ヒントは9つの点以外に目を向けることです。

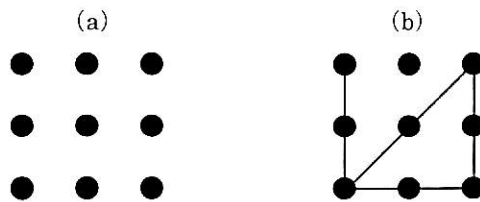


図1. 一筆書き問題

この問題は、「視点を変えてみること」の重要性という意味で出したものですが、研究の独創性、アイデア、発想なども同じことかと思っています。坂道は、上から見れば楽な下り坂となり、下から見ればきつい上り坂となります。ドアも同じです。外から部屋に入るときは入り口で、部屋から出るときは出口となります。つまり、同じ坂道もドアもどちら側に立って見るかで、捉え方や機能が異なってみえるというわけです。メンタルトレーニングの中でポジティブシンキングという技法がありますが、これも似たようなものです。あるスポーツ場面をネガティブに捉えると、不安や緊張が生じますが、ポジティブに捉えると、やる気が湧いてきます。同じ事象でもポジティブに捉えるか、あるいはネガティブに捉えるかで、感情状態は大きく異なるわけです。

研究も視点を変えてみれば独創的な研究ができるかもしれませんし、大それたことですが、研究の流れを変えることになるかもしれません。ストレス学説を提唱したH.セリエは、当時の医学界での常識であった一つの病気に対して一つ病因という特異性病因論に対して疑問を投げかけます。その理由は、病人を診ていると、異なる病気でも現れてくる患者の症状は同じであることに気づいたからです。この疑問はやがては、病気と病因は一対一の関係ではなく、多因子からなるという非特異性病因論へと発展することになり、当時の医学会の常識を覆すこととなります。現代社会に蔓延している生活習慣病はまさに非特異性病因論に基づくもので、今ではこれが常識となっています。特異性病因論から非特異性病因論への大転換。これは、まさにH.セリエが治療現場の患者から得たヒントだったのです。

2. 研究の視点と学会発表でのエピソード

研究では独創性が求められます。過去の研究の方法論を変えただけでは二番煎じとなり、ユニークな研究にはなり得ません。しかし、まったく新しい発想で研究を進めると、必ず批判や反論が出てくることでしょう。この批判や反論に耐えるためにもしっかりしたエビデンスを出していく必要があります。これはまた研究の意欲を駆り立てることになります。

私には忘れもしない学会発表でのエピソードがあります。それは非常に面白い結果が出

たので、自信を持って発表したときのことで。ところが、発表が終わり、質疑に入った途端、それを聞いておられた一人の先生が「そんな研究はやめなさい」と言われ、聴衆の皆さんからも失笑を買いました。その先生は私の研究の発想を十分には理解されていなかったようです。理由は簡単で、「運動の効果を求めるための研究」ではなく、「運動の継続化を求めるための研究」だったからです。この先生の一言は私の研究意欲に火をつけました。翌年、納得させうるに足るデータを引っさげて、その先生の前で再度発表を行いました。前列で聞いておられた先生は意見も質問もされませんでしたので、発表のあと「如何でしたか」と伺いましたら、「あのようなデータを出さなければいけない」と。「やったー」と握りこぶしを作った次第です。

私は運動実践や精神的健康に関し、いくつかのアイディアを提示しています。それらはまだ発展途上にあるのですが、たとえば「快適自己ペース」「運動継続化の螺旋モデル」「精神的健康パターン」などがそれです。これらには「運動する人の立場から物事をみている」という共通した視点があります。「知恵」は現場にあり、それを汲み取ることで、現場に役立つ研究ができると思っていますので、このようなアイディアが生まれてきたものと思います。そこでここでは、これらを思いついた発想と研究の成果について紹介してみたいと思います。

3. 「快適自己ペース」の発想

運動生理学の領域では、健康・体力づくりのための運動処方を行う際、個々人の体力（最大酸素摂取量）を測定し、それを基準に至適運動強度を算出して指導しています。しかし、この処方された至適運動強度を誰がまじめに守っているのでしょうか。脈拍数を測定しながら、それに合わせてウォーキングやランニングをし、また自転車エルゴメーターをこいでいるとは思えません。実際に、インストラクターの方に聞いてみますと、「体力を測定し運動処方はしますが、あとは運動者に任せています」との返事。それなら何のために運動処方をするのか、理解しがたいことです。公園や道路でウォーキングやランニングを継続している人は、誰も運動生理学を専門とする人から運動処方をしてもらってはいないでしょう。みんな経験的に自分に最も合ったペースをつかんで実施しているのです。そうであるなら、この自分で獲得したペースこそ継続に役立つのではないかと考えるのは至って自然なことだと思います。しかし誰もその当たり前のことに気づいていません。そこで、この個々人が勝手に用いている自分に最も合ったペース、これを「快適自己ペース（Comfortable Self-established Pace:CSEP）」と命名し、生理心理学的に研究を始めることにしたわけです。建築工学での「快適」とは、違和感を感じないということですので、「快適自己ペース」とは不快を感じないペースという意味になります。よって、運動終了後には絶対に「快」が得られますので、運動の継続に繋がるものと推測されます。

図2は快適自己ペースを基準として、それより速いスピードを2段階、遅いスピードを2段階の運動強度を設定し、ランニング終了直後の快感情状態を調べたものです。快適自己ペースのときに最も高い快感情状態が得られ、それよりも運動強度が高くなっても低くなっても快感情のレベルは減少していきます。見事な逆U字曲線を示しています。このことは、快適自己ペースが快感情を得る最良の運動強度であることを意味しています。この快適自己ペースの再現性は極めて高いので、人それぞれに「快」を感じる固有のレベルがあることになります。これが私の主張する運動継続化を意図した至適運動強度ということですが、運動生理学の方々にはなかなか理解してもらえません。それは、運動生理学では安全・効率・効果という視点で運動強度をみているためで、運動の継続という視点はまったくないからです。人は良いことあるいは効果があるものと分かっているにもかかわらず、その行動を選択とは限りません。健康・体力づくりは継続してこそ意味があるわけですから、運動処方にも継続という視点を導入する必要があると思っています。いつの日か快適自己ペースという主観的な運動強度がウォーキングやランニングの実施の中で推奨されていくことを願っています。

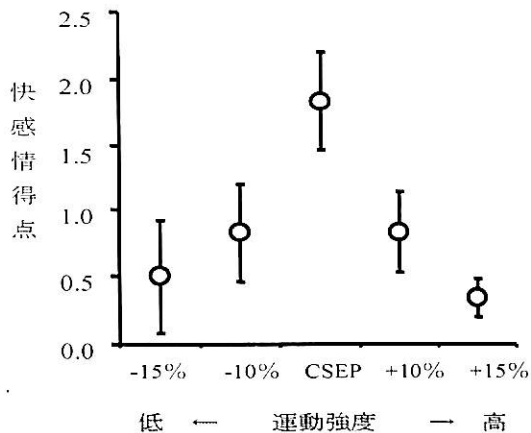


図 2. 快適自己ペースを基準とする 5 段階の運動強度による運動終了後の快感情レベル

4. 「運動継続化の螺旋モデル」の発想

人の社会的行動を説明する様々な行動変容理論があり、計画行動理論、社会的認知理論、トランスセオレティカル・モデルなどは良く運動行動にも適用され、研究が行われています。しかし、これらを運動指導の現場で使うには、難しい側面があります。最近、トランスセオレティカル・モデルが脚光を浴びていますが、これにしても構成概念（ステージ、セルフエフィカシー、意思決定のバランス、プロセス）を説明し、理解してもらわなければなりません。運動指導に携わる方々にもっと分かりやすく、すぐに使えるモデル、しかも種々の行動変容理論に匹敵するか、それを超えるモデルの構築。これを試みているのが、快適自己ペースを用いた運動をベースとする「運動継続化の螺旋モデル」で（図 3）、「快適経験」「目標設定」「結果の知識」「成功体験」「身体的資源」の 5 つの要素からなるものです。この発想は、運動継続者の立場に立って「なぜ運動を続けられるのか」と考えたわけです。そこで得たのは、運動を継続するのは、運動の「楽しさ」や「面白さ」などの快適な経験（快適経験）をしているからであり、このことによって、またやりたいという動機づけが高まり、つぎの運動の目標を設定すること（目標設定）になる。そして、目標を達成するための行動が取られ、その結果や効果を確認すること（結果の知識）になるであろう。目標が達成されていれば、成就感・達成感が得られるという成功体験となり、快適体験へと還元していく。このように運動継続者の心理を考えたわけです。また、運動の継続は身体的側面（技術、体力、健康など）の向上を促しますので、4 つの構成概念は質的に変化すると考え、螺旋構造をとしたわけです。

このモデルの有効性が検証されると、運動指導の現場では、これらの 5 つの要素を運動プログラムの中に組み込めば良いことになります。つまり、運動を快適に行い、目標を設定させ、終了したら振り返りと確認すれば良いわけです。もし目標が達成していなければ、目標設定の見直しを行い、成功体験をつかませるように指導をしていけばよいことになります。至って簡単な実行モデルです。

この螺旋モデルの行動意図への説明力を合理的行為理論や計画行動理論と比較してみると、合理的行為理論よりは高いのですが、まだ計画行動理論までは至っていません。そこで現在では、日本人の行動が他者との関係性で生起していることを考え、これらの 5 つの要素に他者の存在（ソーシャルサポート含む）を付加して、モデルの改定を試みています。現在のところ、他者の存在（ソーシャルサポート）の行動意図への規定力は高いことが明らかにされていますので、この概念が付加され、モデルが修正されたときは、運動仲間やグループを作っていくように指導すれば良いことになります。

この螺旋モデルも運動継続者の視点から構築を目指しているわけで、結構いい線を行っていると自負しています。

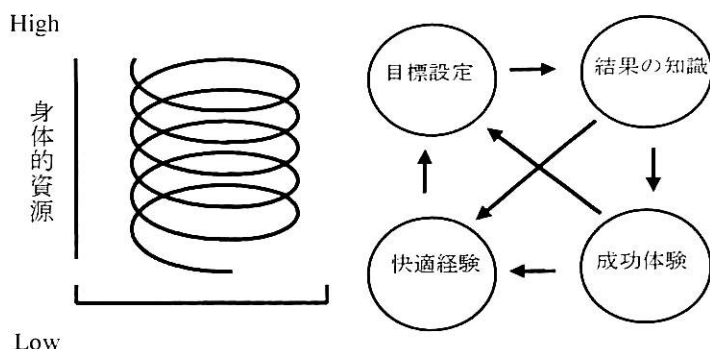


図 3. 運動継続化の螺旋モデル

5. 「精神的健康パターン診断検査」の発想

さて最後に、長期的運動のストレス低減効果をみる際のストレス尺度の開発に関する発想について述べてみましょう。従来のストレス尺度は、ストレス度の高低をみるもので、ストレスが溜まっていなければよしとするものです。しかし、ストレスは溜まっていなくてもだらだらと無為に生活を送っている人もいます。また、ストレスを溜めながらも頑張っている人と疲れ果てて意欲を喪失している人もいますので、これらの精神的健康状態は異なります。このように、ストレス度だけでは判断しがたい人々が実際にはいるわけで、これらを区別して精神的健康度を捉えるにはどうしたら良いのか。そこで思いついたのは、生活上の目標・目的の有無ではないかということです。目標・目的の有無は「生きがい」に通じるものであり、「ストレス度」を「生きがい度」で分割し、精神的状態をパターン化してみることにしたのです。図 4 に示すように、4 つのパターンを「はつらつ型」「だらだら型」「ふうふう型」「へとへと型」と命名しました。名は体を表しますので、この名称で大方その人の生活状況が予測できます。「はつらつ型」は、生活上明確な目標や課題を持っていますが、ストレスがうまく処理されている状態なので、最適なストレス状態といえます。「だらだら型」はストレスは溜まっていないが、明確な目標や課題がなく、ただ日常の生活を平々凡々と過ごしている状態となります。「ふうふう型」は、目の前にある課題が多すぎ、処理しきれず、オーバーワークの状態となっており、「へとへと型」は、心身ともに疲れ果てて目標喪失の状態といえます。

これらの 4 つのパターンは健康意識、体力の認知、食生活、身体活動量などの多くの健康生活関連要因と密接な関係（はつらつ型>だらだら型>ふうふう型>へとへと型の順で良好）にあることが見出されています。よって、この尺度は精神的健康状態の改善・向上に向けて生活の改善を含めて具体的な指導・助言ができるものとなっています。この尺度は使う側にとっても受ける側にとって非常に分かりやすく納得できるものとなっていますが、これも現実に生活している人の実態をみながら開発したものです。

Ⅱ. 日本体育学会第 57 回大会関連

1. プレセミナー

演者報告

動いている人間の中身を知ること（志向分析）

佐藤 徹（北海道教育大学）

1. われわれは人の動きをどのように見ているか

われわれが他者の運動を見るときは、物体の動きを見るときとは異なった見方をしている。客観的経過としてはまったく同じ手の動きであっても、それが踊りの動きなのか、パスの要求の合図なのかはすぐ分かる。それは、われわれが他者の動きを見るときには、その場の状況把握に加えて、動いている人間の意図や意識、感情などを総体的に見ているからである。いわば、その他者が世界とどのように対峙しているかを考えながら、つまりすでに志向分析しながら見ているのである。

現象学用語としての「志向性」は、運動の意図や明確な実施意識などの能動的な面だけでなく、本人も意識していない、いわば自ずからそうになっている地平（行動を「図」とすればその「地」にあたる）といった「受動性」を重要な問題圏とする。したがって、運動を見るときも、動きの外形的変化だけでなく、なぜそのようになっているのかという実施者の内面を解釈することが必要である。

これは、アンケートなどで実施者の気持ちを尋ねたりすることとは異なる。本人が意識していないことの中に事象の本質が潜んでいることは珍しくなく、それは尋ねても聞き出すことは不可能だからである。

2. 眼前の問題の解決のために

古典心理学の極端な行動主義に対する批判から認知科学と現象学が生まれたといわれる。運動学において現象学的立場をとるのは、上達のパターンの理論化・図式化を主要課題とするのではなく、目の前の人間の動きをどうするかを問題としているからである。

具体的にいえば、選手や生徒の技能レベルや経験などの個人性・多様性を排除して実際の運動指導を行うことはあり得ず、すべてがその時々オリジナルな現象、つまり即興なのである。その意味で運動学は臨床の理論をめざしている。

3. 臨床の理論とは

いうまでもなく臨床とは医療の現場を表す用語であるが、ここでいう臨床の理論とは単にベッドサイドの出来事という意味ではなく、中村雄二郎の「臨床の知」や鷺田清和の「臨床哲学」などで唱えられている「医師と患者の相互関係から発展する理論」であり、人間の体を対象物体として扱う西洋医学の思想とは対極にある。これはスポーツ現場では、運動を教える側と教わる側の関係にあたる。

4. 運動指導の事例

跳び箱が跳べない子が、踏み切り板のところで立ち止まってしまう、あるいはバレーボールのゲームをすると、自分のすぐそばにボールが落ちてても手を出そうとしない子がいる。このようなとき、できない子どもに同情

して激励のことばをかけるだけでできるようになれば問題はない。また、熱心に指導しているつもりで何度も注意してもできるようにならない場合には怒り出す指導者もいる。勇気がなくて跳べないのではない、引っ込み思案で手を出さないのではないということに教師は気づかなければならない。

ここで問題となるのは学習者である生徒のキネステーゼへの洞察である。フッサールが提唱した「キネステーゼ(Kinästhesie)」は“自分にできる”という「運動感覚能力」である。目の前にある溝を跳び越えようとする場合、自分には跳べるという(身体的)了解があれば実際の行動に移るが、ないときには抑制作用が働く。当たり前のことのように、とび箱を跳ぶのに必要なキネステーゼをもっていない子どもに向かって勇気だけを要求する教師はいないとはいえない。

運動の学習・指導においてキネステーゼへの洞察はもっとも大きな意義を持っている。運動指導における志向分析はキネステーゼ分析と言ってもよい。キネステーゼ理解という視点を欠くと、動きを外側だけから見るようになる。つまり物体の動きと同じ見方をしてしまうのである。

5. 研究の固有性

志向性としてのキネステーゼは、観察をとおした解釈によってのみ把握が可能である。したがってキネステーゼ分析は分析者の能力に依存するため、科学的意味での客観性はありえない。しかしこのことが同時に非学問的ということではない。むしろ、人間の行為はその時々オリジナルであることからいえば、数値化が可能な事項のみを抽象する研究手法が生命ある人間の研究にふさわしいかど

うか吟味すべきであろう。

数値で表すことのできないものは、事例を挙げて言葉で説明することになる。その際、説明しようとする現象の本質が如実に表れている事例を見つけ出すことが重要である。しかしこれはサンプルの数を増やすだけでは不可能である。われわれが普段なにかを見るときにはすでに何らかのフィルターを通して見ているので、それをはずす作業(現象学でいう「エポケー」)を経たうえでなければ本質を探り出すことはできない。そこに事例研究の難しさと固有性がある。

1. プレセミナー

傍聴記

豊田 則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

私は、佐藤徹先生（北海道教育大学）を演者としてお招きしたプレセミナー『動いている人間の中身を知ること（志向分析）』に参加させていただきました。以下には、その感想を認めたいと思います。

まずもって、弘前はとても暑かった！「弘前はきっと涼しいに違いない」と期待していた私は、青森空港に降り立った際に「きっと弘前も暑いぞ！これはしまった」と思いました。8月17日の屋外は摂氏35.7度まで上昇する真夏日にも関わらず、会場である弘前大学総合教育棟310教室に到着して更に驚いたのは、エアコンが作動していない！ということでした。じっとしているだけで滴り落ちる汗をタオルでぬぐいつつ、風通しの良い窓側に着座しました。そしてセミナーは始まり、阿江美恵子先生（東京女子体育大学）の司会の下、佐藤先生のレクチャーに続き、栗木一博先生（仙台大学）に指定討論していただくという形でプログラムは進められました。

佐藤先生にはフッサールの提唱する解釈的現象学の立場から、運動現象を捉えることの有益さについてご教授いただきました。私は、昨今の質的研究法の隆盛に伴い、以前から解釈的現象学に大変興味を持っておりました。それ故に、今回のプレセミナーも大変楽しみにしておりました。

佐藤先生は、特定の運動指導場面の例（跳び箱の開脚跳び）を挙げながら、「できない」が「できる」ようになるために迎える骨折りを解釈的現象学の立場から捉えることで「でき

ない」の中で生じている「キネステーゼ（運動感覚能力）」を解釈し、運動指導に役立てることができる、丁寧に詳説していただきました。特に、運動現象の詳細な説明・解釈を試みようとする場合、高度な専門性を有することが求められます。「マット運動の後転」のVTRを見ながら、その場で運動現象の説明・解釈を試みられる佐藤先生の語り口からは、その高度な専門性の片鱗を垣間見ることができた一方で、当然のごとく、先生の温かいお人柄までもうかがい知ることができました。更に、そこでの解釈は、「実施者の中にプロレプシスがないとキネステーゼが獲得できない」、すなわち、「実施者が運動の先取りができなければ、どのようなキネステーゼが必要なのかが分解できない」ということでした。これには、観察者の解釈行為が前提だということがわかりました。フロアの先生方の反応をみると、客観的な科学的方法論が確立されている心理学に長年携わっていらっしやった故に、敢えて観察者の主観からアプローチしようとする立場は、大変新鮮に感じられたようでした。

「涼しいと思っていたのに、弘前ってこんなに暑いんだ」と私の期待は大きく外れましたが、質的研究法に大変興味を持っている私にとって、今回のプレセミナーは期待以上のものとなりました。お暑い中、遠方よりお越しいただきました佐藤徹先生にはもちろんのこと、企画・運営に携われました先生方にも、厚く御礼申し上げます。

2. キーノートレクチャー 1

演者報告

内田 若希（九州大学大学院芸術工学研究院・日本学術振興会特別研究員）

日本体育学会第 57 回大会にて、「身体障害者の自己の再構築に果たす運動・スポーツの役割」というテーマで、① 身体障害者における運動・スポーツ心理学研究の概観、② 中途身体障害者を対象とした自己に関する研究の問題点、③ 今後の展望の 3 つの観点からお話しさせていただいた。以下に、内容の詳細を報告する。

1. 身体障害者における運動・スポーツ心理学研究の概観

近年の身体障害者における運動・スポーツの振興は、第二次世界大戦によって多くの国々で戦傷病者が輩出された際に、英国のグットマン博士がリハビリテーションにスポーツを積極的に取り入れたことに端を発する。現在では、身体障害者における運動・スポーツは、リハビリテーションやレクリエーションにとどまらず、国際競技レベルにまで発展を遂げている。

身体障害者における運動・スポーツ研究の動向をみると、道具（車いす、義肢など）のデザインを含めた動作に関する研究、スポーツパフォーマンス向上に関する研究、運動・スポーツへの参加に関する研究、運動・スポーツの生理・心理・社会学的恩恵に関する研究、運動・スポーツに影響を及ぼす歴史・哲学・法律・社会的要因に関する研究など多岐にわたる。

しかし、従来のリハビリテーション医療やリハビリテーション的な運動・スポーツ

では、障害により失った機能の回復を目的としており、心理的側面は軽視されがちであった。だが、近年では失った機能に執着するのではなく、残存機能の可能性や内面的価値に注意を向け、障害を受容していくことの重要性が高まってきた。特に、中途身体障害者は、事故や病気により身体機能や身体の一部の喪失を経験し、障害に起因する個人と社会環境との関係における問題もあいまって、自己概念が否定的な影響を受けることが多くの研究で報告されている。自己概念は QOL の一側面であるので、自己概念が否定的な影響を受ければ、QOL の低下にもつながることが予測される。これらのことを鑑みると、QOL の一側面である自己概念を検討することは非常に意義がある。

2. 中途身体障害者を対象とした自己に関する研究の問題点

1) 理論モデルの不在

1960 年から 70 年代にかけて、自己概念（自尊感情）の構造は一次元モデルでアプローチされてきた。この一次元モデルとは、構成要素を単純にひとまとめにして自己概念を捉えるものである。しかしながら、一次元モデルは、基本構造や構成要素の関係性、および変化のメカニズムを明確化できないという弱点があり、広く批判されるようになった。この流れを受けて、その下位領域を評価するために下位尺度を切り離し

た多次元モデルが主張された。これは、構成要素を身体的側面や社会的側面などに分類し、様々な側面から定義するものである。さらに、1980年代以降、自己概念へ影響を及ぼす心理的変数（身体的自己知覚、社会的自己知覚など）や変容メカニズムを明らかにするために、多面的階層モデルへと発展していった。Fox & Corbin (1989) や Sonstroem & Morgan (1989), Sonstorem et al. (1994) などの多くのモデルが提示され、自己概念（自尊感情）の構造や変容メカニズムが示されるようになった。にもかかわらず、身体障害者を対象とした研究のほとんどが、いまだに単純な一次元モデルとして取り扱っており、今後は多面的階層モデルに基づいて検討していくことが望ましい。

2) 量的アプローチの限界

従来の量的アプローチは、現象を計測し定量化することで客観的な結果を導き出し、それを一般化することが可能である反面、方法論的な基準を満たそうとすると肝心の日常生活において意味のある問題から研究がかけ離れてしまうという問題点を含んでいる。一方、質的アプローチでは、日常生活の多様性に対応するために研究対象に対する開放性が重要視され、具体的な人や状況に結びついた知見を実証的データに基づいて生み出していくことを目指す。

方法論的な基準を満たすことが求められる量的アプローチにおいて、身体障害者を対象として精度の高い研究を行うためには、様々なバイアスを削除するために多くの対象者を確保する必要がある。しかし、対象者の確保は容易ではなく、研究デザインが稚拙になりがちであることが指摘されてい

る。加えて、身体障害者を対象とした研究における結果の一般化やひとつの理論モデルをすべての障害者へ当てはめることの問題などもある。これらの問題を補うために、質的アプローチが有効であるといえよう

3. 今後の展望

1) 多面的階層モデルの精緻化

中途身体障害者を対象に、Fox & Corbin (1989) の多面的階層モデルの適用が確認されているものの、モデルの下位領域である「スポーツ有能感」「体調に関する知覚」の項目の位置づけには課題が残されており、その位置づけや内容を再検討する必要がある。

2) 実践研究の必要性

これまでの研究は横断研究のみにとどまっているので、実際に運動・スポーツによる介入を行い、多面的階層モデルに準拠しながら変容メカニズムを縦断的に検証していくことが望まれる。

2. キーノートレクチャー1

傍聴記

高井 和夫（文教大学）

日本体育学会第57回大会は残暑厳しい弘前大学で8月18～19日の日程で開催された。折しも台風接近中の会期で、参加者・発表者の先生方の往路については空路・陸路に関わらず若干の混乱があったと記憶する。往路途中、緑鮮やかな稲穂まぶしい田園地帯が車窓に広がった瞬間、東北に足を踏み入れたことを実感した。

本大会での体育心理学専門分科会主催のキーノートレクチャー1では学位論文取得直後の新進気鋭の研究者、内田若希氏（学術振興会特別研究員）が登壇され、「身体障害者の自己の再構築に果たす運動・スポーツの役割」の演題で講演がなされた。概要は身体障害者のスポーツ心理学研究の詳細なレビューに始まり、本研究の独自の視点である身体障害者の自己概念変容における多面的階層的アプローチの詳細について実証的検討であった。中でも、受傷に伴い身体的な自己の喪失と同時に社会的な自己の揺らぎに直面すること、そして受傷前の自己の価値観の喪失と変容を迫られること、そこでの運動・スポーツ開始を契機とした変化（「受傷し今まで通りできなくなったことへの気づき」、そして受傷前の自己の否定的な側面からの脱却と再構築に至るプロセスが、量的および質的研究方法を通して詳述されていた。そこでのまとめとして身体障害者の運動・スポーツの役割とは、価値観の転換および障害者という枠組みからの脱却と論じられていた。

ご講義を伺っている途中、健常者を対象とした運動・スポーツの役割については直接的にも

間接的にも体験的な知識を有するが、対して身体障害を経験された方々のそれについては、語るべき言葉を見つけられない自分の不甲斐なさに気づく。それは当然のごとく存在する「身体」を予期せず喪失するという体験の「重さ」について、その事態に直面した当事者のみしか語り得ない個々の言葉や思いについて、研究という「一般論」では収めきれない「壁」が現前するからであろうか。

本講義で紹介された一連の研究では、この末席の輩の「バカの壁」に応えるべく、身体障害者の自己の再構築と運動・スポーツの関係性について質的検討を含めて丁寧な検討されており、スポーツ科学の新たなパラダイムを指し示すブレイクスルー的な成果であるとの感想を持った。身体障害という広義の自己概念の変容を個人の意図・意志に関わらず迫る事態において、その当事者たる障害者の方々に運動・スポーツがどのような直接的・間接的な貢献を果たしうるのかについて、より深い質的な検討について興味を持たれ、本研究の今後のさらなる発展が期待された。

本大会のように気鋭の若手研究者の研究成果を拝聴できることで本専門分科会の人材の厚みを実感するとともに、本会のオーガナイズにご尽力下さった先生方に感謝申し上げます。次年度は神戸大学開催となりますが、最新の研究成果に与れるとともに再会を楽しみに期しております。

3. キーノートレクチャー2

傍聴記

立谷 泰久（国立スポーツ科学センター）

「中込先生の話は、難しくてよく分からない」と表現する人がある。実は僕自身も、数年前まで「先生が話されることってよく分からない…。臨床分野のカウンセリングって難しいんだな…」という印象を持っていた。しかしこの1～2年は、中込先生が話されることについて、だんだんと分かるようになってきた（分かった気になっているのかもしれないが…）。本傍聴記では、先生のお話の中で印象に残ったこと、そして僕が理解する「中込先生」について書きたいと思う。

本キーノートレクチャーは、「先生の心理臨床のご経験」、「事例の提示」、「アスリートの心理臨床における『身体』のもつ意味」、そして「まとめ」、と話が進められていった。最初に印象に残ったのは、20m という短い距離が投げられないという「心因性の投球失調を呈した大学生」の事例であった。その背景には、「対人関係、特に親しい人の距離感」の問題があった。つまり、「身近な人との距離の問題が、そのまま投球に表れてしまった」というものであった。また、「試合になると演技が小さくなる」という選手の事例は、日常生活の窮屈さが演技に影響を及ぼしたのではないかと解説された。これらの事例に「なるほど」と思いながら、「身体を持つ意味—窓口としての身体」の話を聞くと、さらに納得した。「体育の学生は、自分のことを語るのが下手」、「運動の中で、心を語っている」という“中込語録”には、自然と共感できる自分がいた。「なぜ共感が湧き上がってきたのか」と考えたところ、学生時代のクラスメイトを思い出した。

僕のクラスメイトには、全国で活躍する選手たちがゴロゴロいた。しかし、その選手達は、自分の競技以外のことにはあまり関心が

なかった。その当時は、「競技以外のことは考えられないのだろう」と思っていた。しかし、先生の話聞くうちに、「あのクラスメイト達は、『考えられない』のではなく、『自分の感じたことや考えをうまく表現できない』のだ」ということに気づいた。自分の競技に打ち込み過ぎで、その他のことが不器用になってしまったのだろう。そのような選手が何らかの「心の変化・課題・問題」に直面すると、そのことを言葉で表現できないから、プレーに現れる。つまり、言葉で表現できないことを、身体で表現してしまっているのだ。逆説的に言い換えれば、「身体に何らかの『異常』が見られたら、それは『心の訴え』かもしれない」と考える。このことに気づかせてくれたのは、中込先生の話、そして“中込語録”であった。

また先生は、「スポーツ選手のメンタルの分野に関わる人間は、この『視点』を忘れてはいけない」、「体育の人間は、体育の人間の『視点』から選手の心を考えよ」と言っておられるような気がした。

本傍聴記では、僕なりに理解している「中込先生」を書いてみた。当たっていないかもしれないが、「外れてもいない」というわずかな確信もある。先生は、今年度から学内の要職に就かれ、非常に多忙な日々を送られていると聞いている。しかし、先生には、今後もアスリートの心理臨床の分野でご活躍頂きたいと思う。そして、スポーツ選手の心を扱う我々（特に若手）に対して、どんどん厳しいお言葉を投げかけて欲しいと勝手ながら思う。

4. シンポジウム

司会報告

橋本 公雄（九州大学健康科学センター）

弘前大学で開催された日本体育学会は、まさに嵐の中での学会大会であった。シンポジウム前日の夕方、シンポジストの一人の堤俊彦先生から携帯に連絡が入った。「大阪を発ち弘前空港の上空を旋回したが、濃霧で着陸できず、大阪へ引き返してきた、シンポジウムに間に合わないかもしれない」とのこと。また、もう一人の宮城政也先生もまだ弘前には入っておられず、当日の朝になるという。血の気が引いた。当日は、シンポジウム開催1時間前に打ち合わせを行うことになっていた。しかし、会場に来られたのは小橋川久光先生お一人だけであった。そのとき携帯が鳴った。「今、弘前空港に着いた、これからタクシーを飛ばして、会場に行きます。」と、ほぼ二人から同時に連絡が入った。しかし、シンポジウム開始時間には完全に間に合わない。そこで、どちらか一人が会場に来られたら、ぶっつけ本番で、順番も無視して始めることにした。遅れること15分。宮城先生の到着で漸くシンポジウムを開始。このような体験は初めてであった。「楽観主義」は宮城先生のシンポジウムのキーワード。口に出しているのは易しいが、現実になると、なかなか楽観的に捉えられないことを改めて知った。

今回のシンポジウムでは、今アメリカで起こっている「ポジティブサイコロジー」運動が如何なるものかを参加者の皆さんと共有するため、堤俊彦先生（近畿福祉大学）には、ポジティブサイコロジーの発展の背景と概要、および人が持つ「強さ」について話して頂き、小橋川久光先生（琉球大学名誉教授）には、

体育・スポーツにおけるフロー体験について話題を提供してもらった。また、宮城政也先生（沖縄県立看護大学）には、沖縄県民の楽観性と健康状態から両者の関係について報告してもらった。「フロー」と「楽観性」をキーワードにしたのは、ポジティブサイコロジー運動の中心的な働きをしているのが、セリグマン（楽観主義）やチクセントミ・ハイ（フロー）であったからである。

シンポジウムは、まず堤先生にポジティブサイコロジー運動の概要を話していただき、「フロー」と「楽観性」の位置づけを行った上で、進める予定であった。しかし、その流れができなかった上に、十分なディスカッションの時間も取れなかった。そのため、参加者の皆さんにはいま一つ今回のテーマに関して理解が深まらなかったのではないかと思います。ポジティブサイコロジーは運動であって、新しい概念を打ち立てているわけではない。わが国でも、運動・スポーツ心理学研究の領域で、ポジティブ感情、自尊心、楽観性、QOL、心理的特性（スキル含む）等々のポジティブサイコロジーの側面を扱った研究は行われている。アメリカでは、すでにポジティブサイコロジーの機関誌も発刊され、爆発的な研究の発展がみられる。われわれもこの心理学の流れに注目していきたい。ポジティブサイコロジーがポジティブシンキングと誤解されがちであるが、そうではなく、人間の「強さ」や「美德」にフォーカスしていることを再確認していきたいものである。

4. シンポジウム

演者報告

宮城 政也（沖縄県立看護大学）

国際学会並の移動距離(時間)? 学会前日、沖縄那覇を 11:30 に出発して、青森空港天候不良のため、羽田空港へ逆戻り。若干の疲労を感じつつ、このときの時計は 19:00 を指していた。翌日朝一番で青森へ向かうことになったが、時間的に会場（弘前大学）への定刻での到着は至難の業である。さらに天候が回復しなければ遅刻どころの話ではない。シンポジウムに穴を開けることは、シンポジウム企画者の九州大学橋本先生はじめ、その他のシンポジストの先生方や多くの会員の皆さんに多大な迷惑をかけることになる。そのようなことを悶々と反芻しつつ、ホテルで明日の話す内容、テーマ「ポジティブサイコロジー」に思いを馳せてみた。「ポジティブサイコロジー」といってもその詳細に目を向けると、これまで教育、指導の場面で多く活用され、特に目新しいことはないし、メンタルヘルスの視点においても然りである。しかし、何故、今「ポジティブサイコロジー」なのか、その理由の一つとして、世の中が、複雑多様化し、スピーディーに進行する中、そのスピードに乗り遅れると私たちは、殺伐とした感覚とともに様々な場面で不安・緊張感などを増長することになる。つまり、ネガティブな側面が表出するわけであるが、そのことは、他方において現実を客観的に、当たり前認知することの難しさを示している。私たちが生まれながらに持つポジティブな側面で、ネガティブな側面を凌駕するためには、私たちが日々

の生活を営む中で、ものの善し悪し、嘘と真実、強さと弱さや無知の恥と無知の幸せ・・・等々の相反する両面の存在を思慮深く理解し行動・実践することが必要になると考えられる。このとき「ポジティブサイコロジー」の視点は、看過できない概念となり、その価値が高まっていくのだろう。私自身、今回の一件で多少悶々とはしたものの、10分も経てば、なるようになるか（沖縄方言：ナンクルナイサ!）と考えていた。なかなかポジティブである。翌日、会場到着はシンポジウム開始後 20 分を経過していた。シンポジウム企画者の九州大学橋本先生曰く、微笑を浮かべ「よく来てくれました」の一言、やはり企画者も「ポジティブだ」と思いつつ、すぐさま、シンポジストとしての役割を遂行しなければならなかった。今回のシンポジウムが有益であったかどうかの評価は、参加していただいた多くの先生方へお譲りするとして、今回のシンポジウムを通して、橋本先生、小橋川先生、堤先生ご指摘のように、「ポジティブサイコロジー運動」の体育心理学領域での応用と活性化を祈念しつつ、参加報告記としたい。

4. シンポジウム

傍聴記

相馬 幸樹（大阪体育大学大学院）

平成 18 年の第 57 回日本体育学会が弘前大学文京キャンパスにて開催されました。今回、体育心理分科会のシンポジウム「体育・スポーツ・健康教育におけるポジティブサイコロジーの視点」では、天候不良による飛行機の遅れもあり、予定とは若干異なりながらも司会の橋本公雄先生（九州大学）による絶妙な「テーパー時間」のトークと共に幕を開けました。

私自身ポジティブサイコロジーについての知識に乏しかったことが幸いし、自然と 3 人の先生の発表に吸い寄せられるように聞くことができました。

堤俊彦先生（近畿福祉大学）は、心理学はネガティブな側面（心の傷害、苦痛、精神病理）を対象に発展してきたとし、健康心理学の立場からポジティブサイコロジー研究の詳細を報告されました。そこでは、ポジティブサイコロジーの概要が理解しやすくまとめられており、特に、CSV（Character Strengths and Virtues）の提示は非常に印象深いものでした。また、ヘルスサイコロジーの視点から、ソーシャルサポートやコントロール感について触れられていたことに興味を持ちました。

小橋川久光先生（琉球大学）は、ポジティブ心理学としてのフロー研究を紹介されました。フローの定義を「1 つの活動に没入していて、他のものは問題にならない状態であり、その経験自体が非常に楽しく、純粋にその活動をするために多くの時間や労力を費やす状態である」とされました。そして、スポーツフローへのピラミッド曲

線をあてはめた仮説モデルの提示は大変興味深い内容でありました。このような、フロー研究の視点からスポーツ選手の心理的スキルを分析するヒントが得られるのではないかと想像力をかきたてられる内容でありました。

宮城政也先生（沖縄県立看護大学）は、沖縄県民の「テーパー主義」と「ナンクルナイサ」という表現を用いられ、印象的でありました。そして、沖縄の県民性とヘルスプロモーションを織り交ぜた内容の報告の中で、特に、楽観・悲観的傾向をクラスター分析により分類された提示は非常に理解しやすい内容でありました。またこの報告を通して、横断的研究には限界あり縦断的研究が必要であるとの説明がありました。

発表後の質疑応答は、高妻容一先生（東海大学）から「ポジティブシンキング」と「ポジティブサイコロジー」の違いについての見解が印象に残りました。ポジティブシンキングとは、メンタルトレーニングにおける心理的スキルの 1 つであり、ポジティブサイコロジーはもっと大きな分類であるという考えはとても納得できるものでした。

今回のシンポジウムでは、心理学におけるポジティブな視点に目を向けることの意味だけでなく、スポーツ心理学の流れを把握することができました。今後のスポーツ心理学における新しい研究の方向性が示されたようなシンポジウムであったと思います。

5. 口頭発表

座長報告

筒井 清次朗（愛知教育大学）

本セッションは、以下の3名の先生の発表から構成されていた。

服部明子先生（大阪青山短期大学）の発表は、保育者を目指す学生の身体表現特徴を明らかにすることが目的であった。先生の発表は、発表内容が多岐にわたっており、また、データが豊富であったため、聴衆（座長も含めて）が内容を理解しきれていなかったかもしれない。数年前から抄録の分量が減った分だけ発表者の負担は減ったものの、聴衆には内容を理解する情報量が減っている。せっかくの発表を聴衆がよく理解できるように、ハンドアウト等を用意していただくか、発表の最後に、発表要旨を簡潔な文章で提示していただくにより良かったのかもしれない。研究目的のためには、統制群となる対象者を加え、保育者を目指す学生とその統制群とを比較することによって、より明確な知見を得ることができるのではないかと感じた。

西田順一先生（九州大学大学院）の発表は、低社会的スキル者におけるコミュニケーションスキル支援の効果を検討することであった。その対象者が、弁護士等を志している法学部生ということで、本研究とは直接関係ないものの、彼らの社会的スキルが一般人よりも低いということで、将来弁論を主とする仕事に就けるのかと、心配になってしまった。結果としては、社会的スキルの効果はみられたものの、その効果はそれほど大きくなく、日常生活場面に波及するかは今後の課題であった。研究方法としては、非対面式インタビューが

用いられているが、対面式でない場合には、表面的な調査で終わってしまうのではないかという危惧が感じられた。また、発表における対象者の説明において、個人が特定可能な情報が提示されていたことから、個人情報保護の観点から、対象者の同意の有無について、井上則子先生（津田塾大学）から質疑があった。発表者は、事前に学会発表をすることの了承を得ていたから問題ないと返答していたが、質問者は、それでは不十分であると感じていたようだ。この問題については、学会、あるいは、分科会としても、慎重に対処する必要がある。

井上先生の発表は、縄跳びの交互二人飛びの学習過程における語りの内容を分析することによって、身体と心の統合過程を明らかにしようとするものであった。確かに、できない状態から、葛藤を経て、できる状態へ達することによって、人間的に成長できるし、自己概念や有能感が向上することが期待できる。これは、体育の存在価値にも繋がることとを感じる。統合過程の命名の根拠に関する質問があり、先行研究から援用したという発表者に対して、そのこと自体が、統合過程の命名に、先入観として影響してしまうのではないかと、この指摘が、豊田則成先生（びわこ成蹊スポーツ大学）から出された。

5. 口頭発表

座長報告

栗木 一博（仙台大学）

「体育における学習意欲の診断と教育実践」という演題で名古屋大学の西田保先生が発表された。これは「体育における学習意欲診断検査」を用いることによって体育の学習がどのように効果的に行われるかということに関する実践報告であった。この診断検査は「体育における学習意欲」、「学習意欲の類型（タイプ）」、「学習意欲の支持要因」、「学習行動の選好」、「他教科の興味」、「諸活動の興味と体育の楽しさ」といった多岐にわたる項目によって構成されており、生徒一人一人の体育に対する態度、意欲等が詳細に把握できるものである。この利用が体育の学習に極めて有効に機能しているという担当の教員からの報告が紹介された。この報告はいずれも肯定的なものであり、これまで実際に行われていたクラス全体への指導だけではなく、生徒の個性に応じたアドバイスや言葉かけを行うことが可能になったというものであった。質疑応答では、この診断検査を利用しなかった場合との比較研究の必要性が指摘された。また、中学生を対象とした研究ではどのような結果が導かれるのかという質問に対しては、生徒と教師との間の信頼関係を構築すること、つまり、フィードバックを与える、あるいはそれを受容する雰囲気や醸成することがまず重要であるとの回答がなされた。少し、診断検査のボリュームが大きく、活用する側の教師の資質が問われると考えられる。

続いて、「日本人大学生の2種類の身体活動と心理的因子」という演題で岡山大学の鈴木

久雄先生が発表された。これは大学生 5012名を対象とした極めて大規模な調査を行ったものである。調査の内容は身体活動状況および質問紙を用いてのこの身体活動に影響を及ぼすであろうと考えられる自己効力、身体活動に対するバリア等心理的要因に関する調査であった。身体活動の強度によって分類された調査対象者がそれぞれどのような心理的要因を有しているのかに関する詳細な結果分析が行われた。運動を実際に実践させるためには運動習慣なしの層を中程度の運動身体活動に移行させる必要がある。これに対しては男性では時間的バリアが、女性においては自己効力感が最も大きな影響を及ぼしていた。さらに、身体活動の強度が増すためには男性では利得（運動の有効性に対する肯定的な認知）から、バリアへ変化しているのに対し、女性の場合ではバリアが存在していることが報告されていた。質疑応答では、これらの身体活動強度の関連性を因子の存在のみから論じるのではなくその程度に関しても詳細な分析がなされる必要があるとの指摘がなされた。さらに、因子間の交互作用についての質問があったが今後の研究の方向性として欠くべからざる視点であろう。

一件の発表取り消しがあり、時間的な余裕があったため、活発な意見交換が行われた。

5. 口頭発表

座長報告

杉山 佳生 (九州大学)

このたびの学会大会では、口頭発表の座長を担当させていただきました。「分科会会報にその報告を」ということなので、担当した発表の内容を紹介し、個人的な感想を述べたいと思います。

座長を担当したのは、大会最終日午前の口頭発表の最終セッションでした。3名の先生方の発表が予定されていましたが、1演題が都合によりキャンセルとなり、名古屋大学の山本裕二先生と大阪工業大学の木内敦詞先生の報告を拝聴することとなりました。

山本先生には、「ダーツ学習過程のゆらぎ」と題した報告をしていただきました。「練習での変動はゆらぎを生成し、そのゆらぎが学習を促進する」という揺動学習仮説に基づいて、異なる練習方法間のパフォーマンスの違いからゆらぎの意味を理解しようとする研究だと、私は解釈しました（なにぶん、あまりよく理解していない領域の研究なので、誤解があるかもしれませんが、ご容赦下さい）。示された結果は、一定練習ではゆらぎは生じないが、ターゲットを3投ずつ変えるような練習（ブロック練習）ではゆらぎが生まれるというものでした。

この山本先生の研究に対して、私は、ゆらぎそれ自体についてはもちろんですが、「公式のダーツボード」を使つての実験というところに興味を持ちました。ダーツボードの各得点エリアは、同じ形（扇形）はしているがその傾きは異なっており、必ずしも心理的に「同じターゲット」ではないと考えられます。このことから、

実験課題としては非常に利用が難しいものと認識していましたが、あえてこのような課題を用いているということは、生態学的妥当性の高い研究にチャレンジしているという点で、貴重な試みであると感じました。

次の木内先生の発表は、「行動科学に基づく体育授業プログラムによる大学新入生の健康度・生活習慣の改善」というものでした。研究の目的は、行動科学的な手法を導入し、生活習慣等の改善を試みさせる「宿題」を課するような体育の授業を通じて、大学生の健康度が向上するのかを検証することでした。結果としては、このような授業の実践により、身体的及び社会的な健康度は向上し、また、食事や休養に関わる生活習慣も改善されることが示されました。報告後の質疑応答では、統制群においても健康度が向上しているという指摘や、変化プロセスを示す必要があるのではといったコメントが出されていました。

以上、全くタイプの異なる2つの研究発表を担当しましたが、いずれの研究も、新しい視点や方法を導入しているものであり、体育心理学研究の今後のさらなる発展を期待させるようなテーマ・内容であったと思います。座長としても、有意義な時間を過ごすことができました。この場を借りて、関係者の皆様に、御礼を申し上げます。

5. 口頭発表

口頭発表記

西田 順一（九州大学大学院人間環境学研究院）

今年の日本体育学会の会場は、東北・弘前大学であった。初めての東北地方への旅となるため、少なからずわくわくした。私の口頭発表は、期間初日の午前中であったため、前日から弘前に向うこととした。九州・福岡空港から青森空港への直行便は、1日おきに出発する。会期前日の直行便がなかったため、福岡から名古屋を経由し、青森に入った。そして、青森空港から弘前市内まではバスで向った。結局、福岡からの所要時間は、約5時間にもおよぶ長旅となった。到着した弘前市内は、東北地方にいるとは思えないほど蒸し暑い気候で、期間中は30度を超える毎日であった。

さて、今年も昨年に続き初日に口頭発表をさせて頂いた。今年の発表内容は、昨年に引き続き、生涯スポーツ教育により学生のコミュニケーションスキルを如何に高めるかの研究であった。最近、自分が授業を担当する中で学生間のコミュニケーションは一段と希薄化しているように感じている。実際、大学生を対象とした研究結果でも如実にコミュニケーションにまつわる問題が高まっていることが証明されている。今回の発表タイトルは、「対人コミュニケーションスキル支援を意図した生涯スポーツ教育実践の有効性—低社会的スキル者における効果検証—」であった。本研究では、先行研究（西田他，2005）において検証された、生涯スポーツ教育プログラムの有効性が、元来のコミュニケーションスキルが低い学生に対しても同様に検証されるかを検討したものである。先行研究と同様に、対象者のおよそ15%が低いコミュニケーシ

ョンスキルを有する学生であった。その学生たちに対して、コミュニケーションスキルを促進することを意図し、体験学習理論に基づいた7回のプログラムを実施した。そのところ、プログラム前後において「積極的・主張的かわりのスキル」の向上傾向が認められ、コミュニケーションスキルの改善が図られる可能性が示唆された。その一方で、一般学生と比べて、改善効果は大きくはなかったことから、コミュニケーションスキルの低い学生に対する相応のプログラムの必要性も考えられた。

本発表に対して、フロアの高見和至先生（神戸大学）より、「セッション毎のアイスブレイクの必要性」「一般学生へのコミュニケーションスキルの効果」に関するご質問を頂戴した。また、井上則子先生（津田塾大学）からは、「個人情報収集に関するプライバシー保護」に関するご質問を頂いた。いずれの質問も重要な視点で、それぞれに回答することで、今後の研究のアイデアにつながっていくように思えた。

ところで、今回の日本体育学会に至るまでに8回連続で発表することができた。思い起こせば、修士課程2年生が最初の発表であった。それ以来、立場が変わりながらも、毎年コンスタントに発表を続けることができた。今後はどうなるか、はっきりとは分からないが少なくとも10回連続を目指して、頑張りたいと思う。他人と比べ、突出した能力があるわけでもないの、地道に少しずつでも前を見据えて歩を進めていきたいと考える今日この頃です。

5. 口頭発表

口頭発表傍聴記

鶴原 清志 (三重大学)

はじめて訪れた弘前での学会大会に参加し、最終日の5つの発表(1演題が取り消し)を拝聴させて頂きました。本州最北の県で涼しいと思っておりましたら大変暑く、また、会場には冷房が無く、参加者はうちわを片手に発表を聞くということになりました。

はじめにのセッションは楠本先生(日本体育大学)の座長のもと、3つの演題が発表されました。最初の演題は王先生(奈良女子大学)による太極拳式呼吸のコントロールの効果について、脳波等生理的な指標を用いて効果を検討し、その効果が期待されることが示されました。質疑においては、発表において実験方法についての質問がなされました。続いて佐藤先生(ヤマハ発動機)によって、モトクロス競技のスタート前の唾液アミラーゼ活性についての発表があり、スタート前の選手のコンディションの客観的な指標として唾液アミラーゼ活性を利用できる可能性が示されました。質疑では、競技前の測定ということで、どのようなタイミングでまた測定にどのくらいの時間がかかるかなど実用面での質問がなされました。さらには、測定器の貸し出しや販売についての質問がなされ、生理的な指標についての期待の高さを感じられました。はじめのセッションの最後は、乾先生(鳴門教育大学)によるシンクペーション・モードにおける発話と手指の運動の相互作用についての発表がなされ、発話先行群においては、非対称の干渉があったことが報告されました。質疑においては音刺激間隔の時間や発話は具

体的にはどのようなものだったか等の質問がなされました。

次のセッションは杉山先生(九州大学)の座長のもと、2つの演題が発表されました。はじめの演題は山本先生(名古屋大学)によるダーツ学習過程のゆらぎについての発表がなされ、中心のみをねらう練習とねらう場所を変化させて実施する練習での誤差を分析し、後者においてゆらぎがあることが報告されました。質疑において、学習課程におけるゆらぎ必要性やプリテストでの差の影響等が議論されました。最後の演題は木内先生(大阪工業大学)による行動科学に基づく体育授業プログラムによる大学新入生の健康度・生活習慣の改善について発表がなされ、「体育の宿題」として介入プログラムを実施した群の方が、健康度、生活習慣等が改善されたことが報告されました。質疑においては、日常活動性における交互作用の原因や運動への動機づけが議論されました。

以上のように5つの演題が発表されましたが、プログラムを組む上で大変なことは理解しているつもりですが、できればセッションの内容に統一感があればと思いました。しかし、発表されたそれぞれの研究内容はどれも素晴らしいものでありましたし、色々な面で刺激を受けることができました。また、発表の方法や資料作成等、今後の研究発表の参考にもなりました。

6. ポスター発表

ポスター発表記

山田 秀樹（北海道東海大学）

8月18日から20日まで、弘前大学で日本体育学会第57回大会が開催された。真夏の弘前は、思いのほか暑く、前日の17日は34度と報道されていた。18日は、早朝からの大雨の影響で列車が1時間以上遅れたり、運休となったり交通機関に大きな混乱が生じた。発表者である私は、9時からのポスター掲示に間に合うように青森駅を7時41分に出発した。しかし、会場への到着は9時30分になってしまった。若い頃ならば、焦りと緊張で相当混乱しただろうが、天候と交通機関の問題だから仕方がないと自分でも驚くほど落ち着いていた。心理的スキルトレーニングの効果か鈍感になったのか・・・

会場に到着後、早々にポスターを貼り始めたが、会場の体育館内は蒸し暑く、北海道在住の私にはサウナのように感じられた。ポスターを貼り終えたときには、汗だくでまずは涼まなければどうしようもない状態であった。受付で頂いた団扇は、今回の学会では大変ありがたいアイテムであった。

会場は、体育館ということもあり、十分なスペースが確保されていた。ただ、奥の一角が発表スペースであったのが残念である。体育館の中央にパーテーションを配置し、周りに機器・図書展示と休憩スペースを配置した方が、ポスター発表が中心である雰囲気が出て良いのではないだろうか。

近年、専門領域の学会での発表が増えたが、体育学会におけるポスター発表の良いところは、他の専門領域の先生方ともディスカッ

ションの機会を得られることにある。今回の発表は、スポーツに対する欲求の国際比較をテーマにした研究であった。ポスター発表は、興味を持たれなければ見て貰えない。どれくらい反応があるのか不安を感じながら、在籍責任時間前からポスターの前に立った。周りでは各ポスターとも活発なディスカッションが行われ始め、私のポスターにも数名の先生方に立ち止まって見ていただけた。ここで黙って待っているのはディスカッションが始まらないと思い、積極的にこちらから質問をお願いした。また、大学体育連合の冬季研修会で一緒させていただいた先生方が、プログラムから私の名前を見つけて来てくれたのは大変嬉しく感じた。専門領域は違うが、参考になる質問を頂き今後の研究に参考になった。

質問は、研究の方法論と日本とスウェーデンの欲求の違いと文化に大別された。方法論では、私自身が共分散構造分析について未だよく理解しているとは言いがたく、その点をご指導いただけたことが大きな収穫であった。スポーツに対する欲求の差違は、どのような文化的側面が関係しているのかという質問に対し、あまり明解な応答できなかった。国際比較をする場合、その国の文化についてより深い理解が必要であると感じた。

暑さの中ではあったが、今後の課題を確認できる充実した発表であった。

6. ポスター発表

ポスター発表記

佐藤 秀明（日本大学）

平成 18 年 8 月 18 日から 20 日にかけて日本体育学会第 57 回大会が弘前大学文京キャンパスを会場にて開催されました。

体育心理学分野の一般発表は総数 68 であり、うち口頭発表数 12、ポスター発表数が 56 でした。昨年度より数は減っているものの他の分科会に比べポスター発表数は最多でした。そのこともありポスター発表会場は多くの方で賑わいをみせていました。天候に恵まれ会場内の温度はかなり高かったものの、それ以上に発表者と参加者との討論が活発に行われており暑さを忘れるほど非常に活気があるように思われました。また、責任在籍時間を過ぎても討論を続けている演者もいて、熱意を強く感じました。大学院生の発表も多数あり、多くの参加者との討論を積極的に行い、普段の研究成果を発表すると同時にさまざまな意見やアドバイスに傾聴し学ぼうとする姿勢がみられました。

発表内容の概要は、競技スポーツに関連するものがおよそ半数あり、また質問紙調査（アンケート、インタビュー等も含む）のものが発表のおよそ半数ありました。経験的に競技場面に用いられていた考えを裏づけるける形で、従来の理論等をスポーツ場面に適用するものが多くみられました。その中で既に臨床場面に用いられている検査紙を、競技スポーツ場面および競技スポーツ選手を対象とした発展的な質問紙の作成およびその実施を試みたものも多数みられました。スポーツを通じた心理面の多岐に渡る事象は、従来の考えを

基にその応用が必要という流れになってきていることの片鱗を垣間みる感想を持ちました。

研究方法の中で生理的指標を用いたものも多くあり、客観的に心理的变化を分析する手法は、競技スポーツにおいて競技者へのフィードバック資料として今後さらに多くなっていくのではないかと考えられます。

どのセッションも参加者の目を引く独自のプレゼンテーション方法でなるほどと学ばせていただくことも多々ありました。その例としては、ビデオ放映により文字だけでは伝えきれない内容を視覚的に伝えるもの、また多くの参加者が一斉にポスター前に集まってしまうため研究成果を伝えきれないことのないように、対策としてポスターの縮小版を用意し多くの参加者と限られた時間内で多くの討論を交わす考えはよい方法であると思いました。

以上、私の感じた内容を記しました。どの発表もそれぞれの研究分野を発展させていく素晴らしいものでしたが、限られた時間内では十分に内容を吟味することができずありきたりな内容になってしまいました。また機会があれば是非参加したいと思うのが率直な感想です。

6. ポスター発表

ポスター発表傍聴記

松井 幸太（筑波大学大学院）

体育心理学の領域に触れ始めてまだ日も浅く、まだまだ勉強中の身ではありますが、先日弘前大学にて、ようやく私にとっての第二回体育学会を迎えました。このような新参者の拙文をお許しいただき、感じたままの感想を述べさせていただきます。

体育学会のプログラムの中でもポスター発表は、私を含め体育心理学を学び始めた者にとって、もっとも親しみやすい発表形式であったと感じました。発表者がポスター脇に立ち、声をかけやすいことはもちろんのこと、その多くは一对一のやりとりですので、質問内容も各自のわからない所、疑問に思う所をそれぞれのペースで聞くことができる場所にポスター発表の特徴を感じました。それゆえに、ポスター会場では個人個人のこだわりを強く出せ、議論に熱が入っている様子を見ることができました。私もいくつか疑問に思うことを質問する機会がありましたが、それぞれの先生方がこちらのペースに合わせて答えてくださり、言葉を互いに何度も往復させていく中で、それぞれの研究の理解に近づくことができました。また、口頭発表やレジュメには表しにくい研究の背景や現場での問題点なども拝聴することもでき、非常に貴重な時間となりました。

このようなプログラムへの関わりやすさは傍聴する側からだけでなく、発表することに対しても同様のことが言えます。今回は自分の発表をすることなく学会に参加したのですが、昨年の学会で初めて発表を経験した際

に、ポスター発表という形式で比較的抵抗も少なく発表することができ、また傍聴者からのご指摘やアドバイスをいただくことができました。そのため昨年の発表は、それまでの自分の研究成果を確認する場として有意義なものとなりました。そして、今回は傍聴者としての参加ですが、これまた、この一年間の自分自身の成果を確認させてくれるものとなりました。昨年、多くの先生方の発表を拝見させていただいた際、当時の私にはそのほとんどを頭に吸収できず、ただ眺めていただけであったのを思い出しました。しかし、今回は多少なりとも日ごろの成果が出ているのか、昨年とは受け留め方も異なり、自分のものとして吸収できる部分が多くなっていてのように感じます。

昨年の発表者としての参加も、今年の傍聴者としての参加もどちらも自分の成長を確認できる機会であることを実感しました。これからも年に1度、自分の成長の確認の場として、学会大会に参加して行きたいと思っております。

余談になりますが、学会では懐かしい再会があったのはきっと私だけではないでしょう。私は高校卒業以来の友人と再会することができ、また同じ体育心理という道に進んでいることを知り、大変うれしく思いました。そのことを良い刺激とし、自身の活動への意欲へとつなげていきたいです。

Ⅲ. 研究会の活動報告

スポーツ動機づけ研究会活動報告

杉山 哲司 (日本女子大学)

スポーツ動機づけ研究会は、第3回2005年8月27日～28日、第4回2006年8月28日～29日、ともに名古屋大学を会場として行われました。第3回は、質疑応答を合わせて約40分の発表時間で行われ、活発な意見交換がなされましたが、第4回では、持ち時間が50分となり、さらに活発な意見交換がなされました。

第3回の内容は、以下の通りです。

Key Note Lecture : Grounded Theory Approach の適用 (洪倉崇行 : 新潟女子短期大学)

ISSP REPORT 11th world congress of sport psychology 2005 (磯貝浩久 : 九州工業大学)

<テーマ別発表>

1. 健康運動の継続 — 運動の習慣化はいかにして可能か — (村上雅彦 : 九州大学大学院)
2. 動機づけビデオの有効性 — 効果は一過性なのか — (永尾雄一、山崎将幸 : 九州大学大学院)
3. 質問紙を用いた **Flow** 及び周辺概念 — **Flow** への道 — (杉山卓也 : 中京大学大学院)
4. 動機づけの規定因 — 主要な規定因とは — (藁内 豊 : 北星学園大学)
5. 学習動機の低い児童における学習動機の変容過程 — 何が決め手か — (糸岡夕里 : びわこ成蹊スポーツ大学)
6. 体育授業への適応 — 子どもが意欲的に取り組むための工夫 — (佐々木万丈 : 仙台電波工業高等専門学校)
7. 目標志向性と攻撃性 — 自我志向は攻撃的か — (杉山哲司 : 日本女子大学)
8. 心理社会的発達をふまえたスポーツにおける子どもの動機づけ (杉山佳生 : 九州大学)
9. スポーツ経験を通じたライフスキルの獲

得 — 目標設定スキルに注目して — (上野耕平 : 鳥取大学)

第4回の内容は、以下の通りです。

<テーマ別発表>

1. 体育授業に取り組む子どもの心理学的研究の課題 (佐々木万丈 : 仙台電波工業高等専門学校)
2. 子どもの身体に関する自己概念について (藁内 豊 : 北星学園大学)
3. 目標志向性と勝敗に対する態度 (杉山哲司 : 日本女子大学)
4. フットサル競技選手に対して動機づけビデオが与える心理的変容 (永尾雄一・山崎将幸 : 九州大学大学院)
5. 動機づけ雰囲気の下位要素の再検討と動機づけへの影響の仕方の検討 (小縣真二 : 名古屋大学大学院)
6. スポーツにおける動機づけ理論の文化規定 (磯貝浩久 : 九州工業大学)
7. 高校運動部員にとってのストレス体験の意味 : グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析 (洪倉崇行 : 新潟女子短期大学)

発表してみると質疑・応答の中で、動機づけに関する研究情報を知ることができ、自分自身が気づけなかった新たなアイデアなどが提案され、多くの刺激を受けることができます。この研究会は、スポーツに関する動機づけの研究とともに、参加者の動機づけを高めることも大事な目的の一つとなっています。興味のある方の参加をお待ちしております。次回は、2008年5月24日～25日に開催されますので、詳しくは下記までお問い合わせください。西田 保 (052-789-3952)

スポーツ社会心理学研究会活動報告

三木 ひろみ (筑波大学)

スポーツ社会心理学研究会は、昨年度から Vanden Auweele, Bakker, Biddle, Durand, Seiler 著の “Psychology for Physical Education” の翻訳に取りかかり、2006 年 4 月に『体育教師のための心理学』(大修館書店) を出版しました。本書は、European Federation of Sport Psychology のプロジェクトとして、共通の問題意識を持ち共同で出版物をとる意図で刊行されたもので、今回翻訳されなかった 5 部を除き、「健康や体力づくりに必要な態度や動機づけ」「自尊心や有能感に代表される自己認知の発達」「運動スキルの獲得」「社会性・道徳性などの社会的スキルの発達」という内容から構成されています。ヨーロッパ、(のみならずと著者が述べている) 北米・オーストラリアにおける体育の目標として、2 つの身体的目標 (体力・健康・安全と認知・運動技能) と 2 つの心理的目標 (肯定的自己認知と社会性の発達) が挙げられ、体育教師がこれらの目標を達成するために役立ててほしいと著者は述べています。心と体を一つとして捉える観点が重視されている現行の日本の体育にも十分に活かせるのではないかと思います。

今年度は、例会は開きませんでした。沖縄で開催された第 33 回日本スポーツ心理学会大会では、本研究会メンバーである阿江美恵子先生によるラウンドテーブルディスカッション「スポーツ女性の活躍の場を考えるーネットワークの構築へ」と、同じくメンバーの田中ウルヴェ京先生による会員企画シンポ

ジウム「アスリートのキャリアトランジションーキャリアに着目する意味とは」が行われました。スポーツに関わる女性や女性研究者、要求水準の高いレベルで競技に関わるアスリートの現状が、年々明確に把握されるようになり、発表されて共有できるようになっただけでなく、個別のケースや個人の問題としてではなく、体育・スポーツ領域の問題として、社会全体の傾向に照らし合わせて捉えられるようになってきました。個人の問題から、社会と個人の問題へ、そして問題を通じて社会や自分自身と関わることで結果的に人の成長につながるということから考えると、これからもこのようなテーマに積極的に取り組んでいくことが、スポーツ社会心理学研究会の仕事の一つになるのではないかと思います。

この他にも、スポーツ社会心理学研究会のメンバーは、各種競技団体、各県の体育センター、スポーツ研修センター、教育委員会の研究プロジェクトや講習会、企業の講習会等で、競技スポーツ、学校体育や生涯スポーツ、地域活動に貢献しています。本研究会では、来年度も引き続き創造的で生産的な活動を進めていくだけでなく、個々の取り組みで終わることなく、成果をまとめて発表することで広い範囲で情報交換し、広い範囲で活用できるように進めていくことができればと思っています。

臨床スポーツ心理研究会活動報告

伊藤 友記 (九州共立大学)

体育学会に参加したのはなんと6年ぶりのこと。私事で恐縮ですが、この年の4月から念願の大学への正規就職が決まり、長年気にかけていただいていた先生方へのご挨拶も兼ねての大会参加でした(正直それが主目的だったのですが...)。そしてもう一つの大きな参加動機、それは5年前に初めて弘前を訪れた際に聴いて感動した「津軽三味線」のライブをもう一度聴くことでした。5年前に「臨床心理身体運動学会」の第5回大会がこの地で開かれ、その時の私はスポーツの心理臨床に携わるようになって3年目、初めてそこで自身の事例発表を経験したのです。そのため、ここ弘前は津軽三味線の感動的な音色と、初めての事例発表という貴重な体験とが結びついた、思い出深い地だったのです。そんなわけでしたから、会場で先生方にご挨拶を済ませ、大会初日の晩に津軽三味線のライブを堪能した時点で、私の大会参加の目的はほぼ達成されたのであります。それでは少々不謹慎だと叱られそうですが、幸いなことにこの大会への参加をより意義深いものにするのができたのは、大会二日目の晩に開催された「第16回臨床スポーツ心理研究会」への参加でした。前述の通り、体育学会への参加が6年ぶりであったこと、そしてその当時私はまだスポーツの心理臨床には(本格的に?)携わっていなかったこともあり、この研究会の存在は知りながらも参加は今回が初めてでした。今回で16回目を数えることを知り、この研究会に携わってこられた先生方の地道

な歩みを改めて実感したのでした。

この日の事例提供者は、新潟医療福祉大学の山崎史恵先生。バーンアウト症状を呈してコーチから相談を依頼された女性競技者のケースでした。山崎先生のご発表はこれまでもお聞きする機会があり、精力的にご自身のケースを発表なさっておられる真摯な姿にはいつも頭が下がる思いがしています。事例検討会にケースを提供するために費やすエネルギーがいかに大変なものか、そしていかに勇気がいることか、経験が浅い私なりにも知っているつもりだからです。ケースを発表するということは、即ち自分自身をさらけ出すことに他ならず、自身のこころの奥深くを覗かれてしまうのではないかという何とも恐れにも似た大きな不安を伴うことのように思います。それにも関わらずなぜ事例提供をするのか(あるいはするべきなのか)と言えば、やはり行うことによってしか得られない収穫があるから、そしてその経験が自身の血となり肉となりセラピストとしての器を広げていく無二の方法であるからだと私なりに思っています。などと偉そうなことを述べながら、私自身はまだ積極的に事例を提供するという実践は伴わずにいます。幸運にも現在、競技選手のケースを持つことのできる環境にいます。今後この研究会を含め、勇気を出して事例提供の機会を作っていきたいと思っています。

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会活動報告

高妻 容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会の日本支部会としてスタートし、競技力向上を目的としたメンタルトレーニングの現場での実践や心理的サポートに対する情報交換を実施している。

2007年現在、北海道、栃木、関東、静岡、福井、長崎、関西（全体会）、関西（専門分科会）では、毎月1回の研究会を開催している。また東海大学では、毎週1回（大学の休暇期間を除く）の開催を基本としている。さらに毎月の研究会以外にも現場からの要望を受けて講習会の開催も実施している。本年は、4月に新生生の講習（関西）、5月には北海道で3日間集中講習、6月・11月には東海大学で1日講習、8月には関西で1日講習（初級・中級の2日）、1月は東海大学にて野球用2日間講習、3月は関東でサッカー用2日間講習を実施した。

さらに、特別ゲストとして、甲子園優勝チームのメンタルトレーニングコーチ、メジャーリーグのストレングス&コンディショニングコーチ、甲子園大会ベスト8の監督、バスケットボール全日本U-15コーチ、32年ぶり甲子園出場および国体3位の高校野球監督などを招き、現場におけるメンタル面強化、指導者としてのメンタルトレーニングの導入などについて講演をしてもらい、参加者との情報交換も実施した。特に、高校野球監督による32年ぶりの甲子園大会や国体3位までの道のり、そこまでのメンタル面強化についての講演を実施した。具体的には、県大会の

1回戦から甲子園大会を決めるまでの映像を見ながら、この場面ではこのようなことがあった、この場面ではこのような心理的スキルを選手がこう使ってくれたなどの事例報告でもあった。

また、米国のマイアミで開催されたAASP（国際応用スポーツ心理学会）では、約10名以上の会員が参加し、世界30カ国から参加したスポーツ心理学の関係者との情報交換をしてきた。帰国後は、この学会の様子を映像と20ページ以上にまとめられた報告書を使い話題提供がされた。

さらに、JISS（国立スポーツ科学センター）で開催されたスポーツメンタルトレーニング指導士会全国研修会や関東地区研修会にも参加した。加えて、全日本野球会議、コーチサミット、日本体育学会、日本スポーツ心理学会などに参加し、多くの情報収集を得て、その報告を行った。

本年度は、夏季休暇期間のメンタルトレーニング合宿が開催され、ある大学のチームとの合同合宿で、6つのグループに分け、各グループをサポートしながら研修を積み、合宿最後のプレッシャーのかかるあるイベントで選手がどう実力発揮ができるかなどの現場での心理的サポートを体験するという新しい試みもした。

運動学習研究会活動報告

増澤 卓也 (筑波大学大学院)

今年度の運動学習研究会は、2006年6月17日～18日に、筑波大学研修センターで開催された。1991年5月に八王子で開催された第1回大会から、今大会で運動学習研究会も第16回大会になる。演題数は研究発表11題目、ポスター発表6題目であった。今大会も、心理学分野だけでなく、バイオメカニクス、生理学、医学など、多岐にわたる研究者が集まり、様々な観点から議論が重ねられた。

今大会は、視覚覚系の研究が多い印象を受けたが、中でも首都大学の樋口貴広先生の発表が非常に興味深いものであった。発表内容は、Canada・Waterloo大学滞在時における、同校の研究動向と樋口先生の研究成果の報告であった。Waterloo大学のGait and Posture laboratoryは最前線の歩行研究を行っている研究室であるが、実験パラダイムの組み方から、実験装置の作成、実験の運営、実験データの分析まで、非常にレベルが高く、刺激を受けた。中でも興味深い実験結果は、障害物跨ぎ越し歩行時の視覚遮断による跨ぎ越し成功率の変化であった。その結果は、歩行継続時に視覚遮断しても高い確率で障害物を跨ぎ越すが、途中で一旦停止させると成功確立が劇的に低下することである。この実験をおこなったPatla氏は、一連の研究を通して歩行における距離知覚には光学的流動が重要な役割を占めていると指摘している。このような単純な課題であっても、面白い研究に仕上げたアイデアに深く感銘を受けた。

昨年度のスポーツ心理学会大会ラウンドテ

ーブルディスカッションは、「これからの運動学習研究」について議論された。その中で、認知心理学的アプローチからダイナミカルシステムアプローチへと研究のパラダイムシフトが起こってきたが、両アプローチの対立は残り、研究者間でのコミュニケーションが取れないという状況が続いていると指摘された。この問題に対して、名古屋大学の山本裕二先生の発表は新しい切り口であるという印象を受けた。発表の前半では、「相補性」に関する話であった。歴史的に我々は世界を二分して捉えるが、その相互排他的に認識される両極が、実は相補的であり、統合的であること、そしてその間でどのように調和が取られているかが科学的理論に基づいて説明されている。このような調和を取り持つ軟化子があると仮定して、運動と言語の軟化子として運動イメージを可視化し、その時空間正確性を検討した。実験結果はこれからだが非常に興味深い発表であった。

今年度も面白い研究が数多く発表され、内容の濃い充実した2日を過ごすことができた。来年度は国際学会が日本で開催されるなどから、慶応大学で開催される17回大会も活気のある研究会になると期待される。

IV. 研究室紹介

びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ心理学実験室

豊田 則成 (びわこ成蹊スポーツ大学)

びわこ成蹊スポーツ大学は、平成 15 年 4 月に開学しました。まだまだ新米の大学です。従って、ここでご紹介する「スポーツ心理学実験室」もまだまだ未熟です。僭越ながら「勇気」をもってご紹介させていただきます。



びわこ成蹊スポーツ大学 本部棟

本学開学の 2 年後 (平成 17 年) に、豊田一成ゼミナールと豊田則成ゼミナールがスポーツ心理学関連のゼミナールとして開講されました。内訳としては、豊田一成ゼミナール所属の学部生 10 名 (競技スポーツ学科コーチング・技術コース所属) と豊田則成ゼミナール所属の学部生 12 名 (生涯スポーツ学科地域スポーツコース所属) によってメンバーが構成されました。スポーツ心理学実験室は、本学研究棟の 1 階 B105 にあります。現在は、スポーツ心理学のスタッフが豊田則成 (競技スポーツ学科スポーツ情報戦略コース准教授) のみとなり、学部学生は 4 年生 12 名、3 年生 12 名から構成され、新規 (平成 20 年度) に 11 名が所属予定です。

本学のスポーツ心理学関連の開講授業は次の通りです。

①スポーツ心理学 (1 セミスター: 1 年生の前期および後期に開講)

②スポーツカウンセリング (1 セメスタ

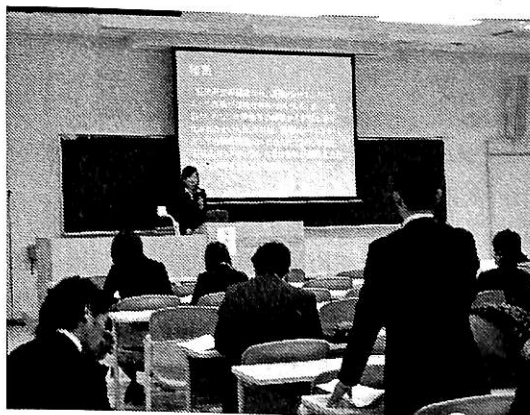
ー: 3 回生の前期に開講)

③スポーツメンタルトレーニング (1 セメスター: 3 回生の前期に開講)

④地域スポーツ演習 (1 セメスター: 3 回生の前期に開講: 関連文献の講読)、

⑤地域スポーツ専門実習 I・II (1 セメスター: 3 回生の後期に開講: 研究法の実践)

①は必修科目でもあることから、前期・後期に受講生が分かれ、それぞれ受講生は 200 名前後になります。②と③は、上級生になってから受講できる科目で、先の①の内容を発展継承しながら授業は展開されています。特に④と⑤は、ゼミナール活動として位置づけられ、受講生は豊田則成ゼミナールに所属する学生が中心です。ただし、他のゼミナールからも数名が参加しています。それは、スポーツとところのつながりについて学びたいと思う学生が沢山いることの証でもあります。また、上記の開講科目の他に、有志による「スポーツ心理学文献講読会」を週一回開催しています。これは、参加者が興味のある文献を読み込んでレジュメを切り、当番制で発表するもので、単位認定されることはありませんが、毎年 20 名前後の学生が参加し、

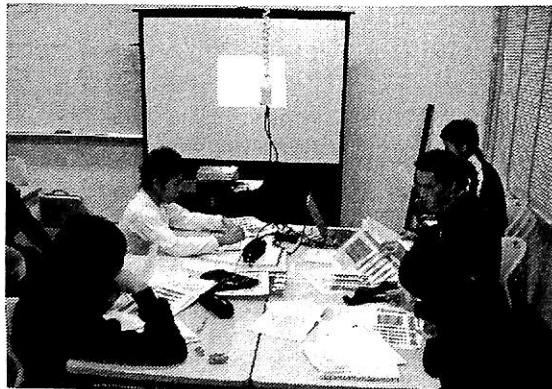


卒業論文発表会の風景

白熱した議論を展開しています。

また、今年4月に本学は大学改組を行い、担当者は生涯スポーツ学科地域スポーツコースから競技スポーツ学科スポーツ情報戦略コースへ配置転換しました。担当者の所属が変更されても、学生たちの「スポーツ心理学」への興味・関心は高まる一方であることを実感しています。学内では人気のゼミナールといえます(?)。また、本学は現在、大学院の構想段階にあります。是非とも大学院を開設し、学生と担当者が一体となって高度専門職の育成を目指したいと願っています。

担当者自身は、近年、質的心理学研究に強い関心を持っています。従って、指導する学生たちの中でも、その多くが質的心理学研究に関心を持ち始めています。インタビュー調査法やGTA(グラウンデッド・セオリー・アプローチ)をはじめとする質的心理学研究法の習得を目指し、また、スポーツに関わって日常的に抱く「素朴な疑問」の答えを求めて、骨の折れる作業に学生たちは取り組んでいます。



ゼミナール活動の風景

平成19年3月に、大学としては「初めての卒業生」、いわゆる「1期生」を世に輩出しました。担当者自身、初めての経験でしたので感慨無量であったことは筆舌に尽くしえません。彼らが行った卒業論文のテーマを以下に列挙したいと思います。

1. 発話を強調するジェスチャーは何か? ～バスケットボール選手の会話に着目して～
2. 幼児がキッズサッカーに求めること
3. ピークパフォーマンスをどのように語るのか

～クラス分析をきっかけにして～

4. なぜスポーツへの関わり方を変えたのか
～スポーツ選手の「語り」に着目して～

5. サッカー経験をどう語るのか

6. 学生アスリートの負傷体験にみる「喪失」と「獲得」

7. 部活動を指導することの意味 ～中学校教諭を対象に～

8. 『キッズサッカー』が与える影響について —キッズリーダーと保育士の語りから—

9. 子どもにスポーツ指導をする中で得られるもの ～スポーツ教室の指導者の語りから～

10. “子どもが求めるもの”に関する心理学的エスグラフィー ～ミニバスケットボール教室を対象にして～

11. 試合前の心の準備をどう語るか ～サッカー選手を対象として～

12. スポーツにおけるスランプ体験をどのように語るのか

ゼミ生の研究テーマ設定は「2月」が山場を迎えます。特に、3回生は「2月」に4回生の卒論発表会に参加した直後に、卒論構想発表会に臨まなければなりません。意欲を高めざるを得ない「2月」を過ごします。

このように、新米の担当者も含めて、まだまだ力不足のスポーツ心理学実験室であることは免れられません。ゼミ生と過ごす時間を大切にしながら、共に成長できる環境にあることをとても幸せなことと感じながら、日々精進していきたいと思っています。



ゼミ生、全員集合!

V. 学位論文紹介

スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす行動的・生理的・心理的影響とその教育的試み

藤野 良孝（独立行政法人メディア教育開発センター）

学位：博士（学術） 授与機関：総合研究大学院大学文化科学研究科

取得日：2007年3月23日 指導教員：山田恒夫教授

論文概要

本論文は、スポーツオノマトペの情報伝達機能が運動パフォーマンスに及ぼす影響の分析および、韻律に対する人間の運動学習の獲得、実践への反映を目的として、運動学習に及ぼす生成特性と知覚特性の分析についての研究をまとめたものである。以下、章ごとに本研究の着眼点及び検討概要を述べる。

序

従来オノマトペに関する研究は、言語学的・音声学的な変数より音韻機能を分析した検討、コミュニケーション機能を分析した検討が多く、運動的機能を分析した検討はなかった。運動的機能が内在するスポーツオノマトペについて、検討が行われなかった所以は、文法的機能を持たないこと、無意識的に使用されていることなどが要因として挙げられる。また、スポーツ指導者の観点から見たスポーツオノマトペは「稚拙」、「こども言葉」、「指導力不足」などネガティブに捉えられ研究と

1 スポーツオノマトペとは、体育・スポーツ領域で使用される擬音語、擬態語、模写語などの総称を示す。特にスポーツオノマトペは、身体性にに基づき（運動に伴う）表出される特徴から、一般的に認められているオノマトペとは定義が異なる。

して注目されなかった。

第一部 スポーツオノマトペの分類と音響的特徴に関する研究

第1章

スポーツオノマトペの使用実態とその分類

これまでスポーツオノマトペに関する実態調査がなかった為、我々は13競技387名の大学生運動選手を対象にスポーツオノマトペのアンケート調査を実施した。調査した結果、全スポーツオノマトペの回答記述は、ハ段、90語(33.7%)、カ段、63語(23.6%)、タ段、56語(20.9%)、サ段、50語(19.1%)に限られた。表出された内容はスピード、パワー、リズム、タイミング、感情まで5つに大別された。使用効果に対する評価は、相互の矛盾する二つの特徴（メリット・デメリット）が同等の妥当性をもって使用されていることが分かった。スポーツオノマトペの必要性は、運動選手個々人で必要とする視点が異なっていたが概ね肯定的に捉えている傾向が示された。

第2章

スポーツオノマトペの音韻的・音響的特徴

先の実態調査で収集したスポーツオノマト

べの音韻型、拍、母音、子音、特殊拍などの音韻分析および柔道の運動過程ごとで発声した声の音響分析を行った。その結果、音韻型は促音、撥音、長音、音韻の繰り返しが語中で接合された型が 10 種確認された。拍は大半が 2 ないしは 3 拍で構成され、子音は /カ/、/ス/、/タ/、/チ/、/ハ/、/フ/、/ボ/、/グ/、/ズ/、/ブ/、/ダ/、/ジ/のいずれかで使用、母音は、/ウ/(56.1%)、/ア/(22.9%)、/イ/(12.7%)の 3 つに限定されることが判明した。子音は各競技の運動内容によって多様に使い分けられていることが分かった。

音響分析では、スポーツオノマトペを豊富に使い分ける柔道選手を選抜し柔道のスポーツオノマトペの調査で使用頻度が高かった /グッ/と /サッ/について、運動過程ごと(崩し・作り・掛け)で発声させ、その韻律的特徴(時間長、パワー、基本周波数(以下 F0))を分析した。その結果、運動過程の強勢と対応し韻律が変容する傾向が確認された。特に、F0 が他の要素より運動強勢と対応することが分かった。

第二部 スポーツオノマトペの呈示が運動パフォーマンスに及ぼす行動的・生理的・心理的影響に関する実験的研究

第 3 章

スポーツオノマトペの呈示が運動パフォーマンスに及ぼす行動的・心理的影響

先の /グッ/、/サッ/を呈示に用いて、握力と全身反応時間の運動パフォーマンスにどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、スポーツオノマトペが高 F0(「1 低い」「6 高い」)になる程、筋発揮へ及ぼす効果が増大す

る傾向が確かめられた。それに加えて、同上の運動を表面筋電図法より生理的に検討した結果、高 F0 になる程、筋賦活量が増大する傾向が認められた。このことから F0 が運動に及ぼす影響は実践的・生理的両観点から検証された。

次に、F0 をシフトさせ韻律を統制したスポーツオノマトペと人工音(純音)が運動パフォーマンスに及ぼす影響の比較検証を行い、両変数が運動パフォーマンスのインストラクションにどの程度差異をもたらすのか検討した。その結果、人の声が人口音よりも運動制御(力の出し分け)が顕著である傾向が示された。さらに、スポーツオノマトペの呈示が実践運動へ及ぼした効果を主観的に評価した結果、運動パフォーマンスを高める際のアプローチ法として有効活用が期待される回答が得られた。

第 4 章

スポーツオノマトペ呈示の運動印象

/グッ/、/サッ/の F0 がどのような力量感覚を有し、どのような印象を与えるのかを、聴取実験より検討した。また 6F0 が 6 強勢(「1 弱い・遅い」から「6 強い・速い」)の運動動画とどの様に対応するのかを選択回答させ両者の適合性分析を行った。その結果、/グッ/、/サッ/の主観評価スコアと F0 の 2 変数間に正の相関が認められた。このことから、高 F0 を知覚するほど主観的な印象がダイナミック(握力ではより強く、全身反応時間はより速く)になる傾向が判明した。

印象に関しては、F0 が高刺激になるほど運動を示す形容詞が高評価されることが分かった。動画と F0 刺激の対応関係は、F0 が高い

刺激ほど動的な動画の評価（適合）が高くなり、静的な動画になるほど評価が低くなることが分った。総じて、F0の高さと運動強勢の対応は、心理的にも行動的にも連動していることが支持された。

第三部 運動学習におけるスポーツオノマトペの応用の試み

第5章

スポーツオノマトペ呈示が運動学習に及ぼす影響

スポーツ指導において、運動の最小と最大の感覚を伝達することは簡単に行えるが、中間の運動（微妙な運動）を伝達させることは難しいと言われている。ここでは、中間の運動を第三者に支援し、運動の共有化を目指したスポーツオノマトペ電子辞典の開発及び教育的応用を試みた。最後に開発した、スポーツオノマトペ電子辞典を使用し/グッ、/サツの内容把握とF0と対応した運動実践を行い、微妙な力出し分けが可能かどうかを検討した。その結果、運動の再生に個人差が見られたが、聴覚訓練（学習）を重ねるごとに微妙な運動制御ができる傾向が確かめられた。このことから、聴覚訓練による影響が運動制御の調節に転移する可能性が示唆された。以上が、第1章から第5章までの結論である。

今回行った研究において、スポーツオノマトペのF0と運動制御、F0と運動印象との間に必然的な関係が見られたということは、スポーツオノマトペの有する機能は、韻律操作によって多様な影響を与えるということが裏付けられたと考えられる。よって、スポーツ

オノマトペのF0は音声的操作により、あらゆる運動印象や運動発揮を変容させることができる可能性を示した。

付 記

総合研究大学院大学の山田恒夫教授、東海大学の吉川政夫教授、早稲田大学の匂坂芳典教授には本研究の指導教官として、私の拙い研究に対して全体的な方向性から詳細な議論と温かい励ましを頂きました。また、独立行政法人メディア教育開発センターの清水康敬理事長、早稲田大学の竹中晃二教授には貴重なご助言、ご指導を頂きましたことを心よりお礼申し上げます。

舞踊における動きの質的变化に伴うボディ・イメージの変化 —舞踊セルフ・エフィカシーの役割—

清水 知恵 (福岡教育大学)

学位：博士 (人間環境学) 授与機関：九州大学

取得日：2006年12月28日 指導教員：橋本公雄教授

1. はじめに

本研究は、舞踊の動きを用いたボディ／マインド・アプローチによって、自己概念の低位概念として位置づけられるボディ・イメージおよびセルフ・エフィカシーといった心理変数の肯定的な変化を促すことを意図した研究である。このテーマの背景には以下のことがある。

踊るという体験においては、その体験をする前と後で、体験者に大きな変化が見られることが頻繁にある。中でも、消極的で、人前で相手の顔を見て話しをすることが容易にできなかった大学生が、体験後には、踊りが技術的に上手くなり人前でも自信に満ちた状態で踊れるようになる。またそれだけでなく、多くの仲間たちの前でも、作品に対し堂々と意見や感想を述べることもできるようになる。さらに好意的な影響として、普段の立ち姿においても、身体のセンターが安定し、自信を持った姿勢に変化するという事例が多々みられる。こうした事例は、舞踊におけるさまざまな技術習得過程での成功体験が、踊ることに対する自信を高め、ひいては自己に対する見方や感じ方に変化を生じさせ、自己イメージおよび自己のボディ・イメージといった自己を形成している概念においても肯定的な方向へ変化させている可能性を示唆するもので

ある。

このことを明らかにするにあたり、本研究では以下の3つの仮説を立てた。第一に、同じ身体活動でも、舞踊の方が、一般的なスポーツ種目と比較して、より効果的なボディ・イメージ変化をもたらす。第二に、動きの質をコントロールした舞踊ムーブメントの体験は、より大きな動きの質的变化をもたらす。舞踊セルフ・エフィカシーおよびボディ・イメージに顕著な影響を及ぼす。第三に、動きの質をコントロールした舞踊ムーブメントの体験が、ボディ・イメージへの影響を及ぼす際に、舞踊セルフ・エフィカシーが媒介する役割を担っている。

仮説を検証するにあたってはモデルとなる理論が必要であると考えられるが、これまでの舞踊を用いたボディ／マインド・アプローチ研究では、動きや動き方とボディ・イメージの関係を調べた研究は見当たらず、仮説モデルも存在しない。そのため、運動によるボディ・イメージ変化の仮説的モデルを一部参考とし、ボディ・イメージの変容過程を明らかにする。また、良質な舞踊フレーズを作るため、動きの質に関する理論に基づき、力性、時間、空間、流れの動きの要素を含む、動きの質を高める「学習用舞踊ムーブメント」の作成を試みる。この舞踊ムーブメントは一般

の授業プログラムの一部にあたるものであり、そのプログラムの効果についても併せて検証する。

以上より、本研究では、ボディ／マインド・アプローチの観点から、舞踊によるボディ・イメージの変化を検討することを目的とする。また、その際、舞踊のボディ・イメージの変化に及ぼす舞踊セルフ・エフィカシーの役割についても検討する。

具体的には、1章では、接触・運動型舞踊ムーブメントの体験が、一般のスポーツ種目より顕著なボディ・イメージ変化をもたらすかどうかについて検討すると共に、セルフ・エフィカシーとの関連性についても検討する。2章では、舞踊セルフ・エフィカシー尺度の開発を試み、信頼性と妥当性検討した上で、尺度の作成を試みる。3章では、動きの質に関するラバン理論を背景に「学習用舞踊ムーブメント」を作成し、コントロール群を設定した5週間の介入研究により、その有効性について検討するとともに、舞踊セルフ・エフィカシーにおける介入効果を検討する。4章では、3章を踏まえた上で、ボディ・イメージ効果をより顕著にもたらしため、7週間への期間延長し、方法論を再検討し、同様の研究を行い介入効果について確認する。さらに、舞踊の動きの質的变化がボディ・イメージの変化をもたらす際に、舞踊セルフ・エフィカシーが媒介しているかどうかについて検証する。

2. 第1章 舞踊におけるボディ・イメージの変化とセルフ・エフィカシーの関係

研究Ⅰ 接触・運動型舞踊ムーブメントに伴うボディ・イメージの変化 —舞踊と

一般スポーツ種目の比較—

大学生の初心者でも適用可能な身体接触と運動性のある動きを基本にした、舞踊ムーブメントを構成し、ボディ・イメージの変化について検討を試みた。その結果、舞踊受講生のボディ・イメージは、コントロール群と比較して、自らの身体に対する強さに関するイメージ、美的イメージ、巧みさに関するイメージなどが変化・向上していた。これにより、同じ運動系の身体的体験であっても卓球やバスケットのスポーツ種目ではボディ・イメージにはほとんど変化がみられなかったことを考えると、接触・運動型舞踊ムーブメントの体験は自己のボディ・イメージに対する認知を顕著に改善あるいは向上させる効果があるといえる。このボディ・イメージの変化をより容易にもたらしした要因には、ボディ／マインド・アプローチという直接的に身体に作用するアプローチによる身体感覚の変化が推察された。

研究Ⅱ 接触・運動型舞踊ムーブメントに伴うボディ・イメージの変化とセルフ・エフィカシーの関係

研究Ⅰで使用した接触・運動型舞踊ムーブメントと同様のプログラムを用い、ボディ・イメージの変化とセルフ・エフィカシーの向上を調べるとともに、両者の関係について検討を行った。その結果、①舞踊受講生のボディ・イメージは研究Ⅰ同様、顕著に向上した。また、②授業種目別の、学習者のセルフ・エフィカシー得点においては有意差が認められ、舞踊受講者はソフトボールや総合種目の受講者と比較して、セルフ・エフィカシーが高かった。このことから、同じ運動を学習するに

しても、接触・連動型舞踊ムーブメントの体験をした方が、よりセルフ・エフィカシーの向上をもたらすことが考えられる。さらに、③授業前後のボディ・イメージの変化と学習者のセルフ・エフィカシーとの関係については、10%水準の群と時間の交互作用が認められた。このことは、セルフ・エフィカシーの向上がボディ・イメージの変化に関係していることを意味し、Lox et al. (2003) らが指摘しているように、セルフ・エフィカシーは運動とボディ・イメージを繋ぐ媒介変数の役割を果たしている可能性を示唆するものである。

3. 第2章 舞踊セルフ・エフィカシー尺度 (ISED) の作成

研究Ⅰ 尺度項目の精選および尺度作成

舞踊特有のエフィカシーをみるために、舞踊セルフ・エフィカシー尺度 (ISED: Inventory of Self-Efficacy for Dance) の作成を試みた。分析の結果、ISED の因子構造については、1 因子構造であり、1 因子 7 項目からなる舞踊セルフ・エフィカシー尺度が作成された。さらに、信頼性について、Cronbach の α 係数を算出したところ、高い値が得られた。また、検査-再検査法により相関係数を算出した結果、高い相関が得られた。これらのことから、舞踊セルフ・エフィカシー尺度の信頼性については、内的整合性が保たれ、尺度の安定性も備えていることが確認された。

研究Ⅱ 舞踊セルフ・エフィカシー尺度 (ISED) の信頼性と妥当性の再検討

さらに十分な信頼性と妥当性を明らかにするため、研究Ⅰとは異なる方法で、再検討を行った。その結果、1 因子構造であることが

再確認された。また、十分満足しうる信頼性が確認され、尺度の内的整合性も保たれていることが確認された。さらに、因子分析モデルの適合性および基準関連妥当性の検討の結果、尺度の妥当性が確認された。このことから、作成した ISED には信頼性および妥当性があり、この尺度により、舞踊独自のエフィカシーを測定できる可能性が見いだせた。7 項目は、踊ることに対する自信や、踊りの再現時に間違えた際の対処・克服に関する自信など、踊りを遂行する上での自信を測定する内容である。

4. 第3章 舞踊における動きの質的变化に伴う舞踊セルフ・エフィカシーおよびボディ・イメージの変化

動きの質に着目し、舞踊における動きの質的向上が、舞踊セルフ・エフィカシーやボディ・イメージへ肯定的変化を促すという仮説のもとに、質の高いムーブメントの学習が可能と思われる舞踊ムーブメントを作成し、5 週間の介入を行い、動きの質的变化と舞踊セルフ・エフィカシーおよびボディ・イメージという2つの心理的変数の変化を検討した。その結果、①動きの質を高める「学習用舞踊ムーブメント」による動きの体験は、動きの質的側面の向上と、舞踊セルフ・エフィカシーの肯定的変化に寄与したことから、本プログラムの有効性が示唆された。また、②ボディ・イメージの変化に関しては、「学習用舞踊ムーブメント」の顕著な介入効果がみられず、実施期間の短さの影響が指摘された。しかしながら、③ボディ・イメージの変化への顕著な介入効果が認められなかった。このことから、舞踊セルフ・エフィカシーを含むメカニ

ズムについては検証できなかった。

5. 第4章 舞踊における動きの質的变化に伴うボディ・イメージの変化ー媒介変数としての舞踊セルフ・エフィカシーの役割ー

第3章での方法論を再検討し、舞踊の学習期間の延長（5週間から7週間）と動きの質を高める「学習用舞踊ムーブメント」の改良を行い、動きの質的变化および舞踊セルフ・エフィカシーの変化とボディ・イメージの変化を調べるとともに、舞踊セルフ・エフィカシーが動きの質的体験とボディ・イメージの変化における媒介変数になりうるかどうか、について検討した。その結果、①動きの質を高める体験は、学習者の動きの質を実際に高めることができ、動きの質を考慮した「学習用舞踊ムーブメント」の有効性が確認された。また、②良質な動きの体験は、学習者の舞踊セルフ・エフィカシーの変化およびボディ・イメージの変化に対して肯定的変化をもたらし、「学習用舞踊ムーブメント」が両変数の向上に有効であることが明らかにされた。さらに、③動きの質的变化に伴うボディ・イメージの変化においては、舞踊セルフ・エフィカシーの変化が媒介変数として役割を果たすことが検証された。

6. まとめ

I 本研究で得られた知見

1. 舞踊セルフ・エフィカシー尺度（ISED: Inventory of Self-efficacy for Dance）の開発

舞踊における独自のセルフ・エフィカシー変化を検討することが可能な、舞踊セルフ・

エフィカシー尺度（ISED: Inventory of Self-efficacy for Dance）を開発した。この尺度の開発研究は、舞踊の動きを用いた介入研究の発展に繋がるものであり、わが国における舞踊における動きを用いた研究分野の発展に大いに貢献するものと思われる。

2. 「学習用舞踊ムーブメント」の有効性

「学習用舞踊ムーブメント」による動きの質的向上のための体験が、学習者の舞踊セルフ・エフィカシーおよびボディ・イメージに対して肯定的影響を与えたことから、「学習用舞踊ムーブメント」の有効性が示唆された。

3. 舞踊セルフ・エフィカシーは媒介変数としての役割

動きの質的体験に伴うボディ・イメージの変化においては、舞踊セルフ・エフィカシーの媒介変数としての役割が検証された。

以上のまとめとして、舞踊における動きの質的体験を用いた介入研究においては、介入の独立変数である動きの質を問う必要性があり、質の良い動きの体験が、舞踊セルフ・エフィカシーおよびボディ・イメージに明確な変化を生じさせるという新たな知見を提示した。

II 今後の課題

1. 舞踊の質的動きに伴うボディ・イメージ変化過程の検討

本研究では、pre-post デザインにおける舞踊に伴うボディ・イメージ変化を調べたが、今後はより詳細にボディ・イメージがどのような過程を辿って変容していくのか、また質的データを含めて検討する必要があるだろう。

2. 媒介変数のさらなる探索および心理変数

間のメカニズム研究

動きの質的变化に伴う舞踊セルフ・エフィカシーの変化およびボディ・イメージの変化に関しては、舞踊セルフ・エフィカシーが媒介変数になる点において、メカニズムを明らかにすることができた。しかしながら、運動によるボディ・イメージの変化に関しては、Lox et al. (2003) らにより、セルフ・エフィカシー、気づき、体力を媒介変数とする仮説モデルが提示されている。これらは、舞踊における動きの質的变化に伴うボディ・イメージ変化が生じる際の、媒介変数として、舞踊セルフ・エフィカシー以外にも気づきや体力といった変数が存在する可能性を示唆している。このことから、新たな媒介変数を含めて、心理的メカニズムの解明を進めるべきであろう。

3. 長期的介入による自己概念への影響の研究

本研究は、授業という比較的短期間の枠内での実証的研究であったが、舞踊を本格的に学ぶ者においては長期間の練習が必要となる。長期間の舞踊の実践は、ボディ・イメージの上位概念である自尊感情にも影響を及ぼす可能性があり、それらの自己概念を含めて研究を発展させる必要があるだろう。

付 記：

本学位論文の完成にあたり、長年にわたって温かい励ましと御指導を賜りました九州大学健康科学センターの橋本公雄教授、ならびに貴重なご助言を賜りました諸先生方に、この場をおかりして心より御礼申し上げます。

競技者の良好な心理的状态に関する研究 —Flow の概念を中心として—

杉山 卓也 (中京大学)

学位：博士 (体育学) 授与機関：中京大学

取得日：2007年3月21日 指導教員：猪俣公宏教授

スポーツ心理学の分野において、その研究目的の1つは、スポーツ行動を明らかにすることである。そのために、アスリートのスポーツ経験を理解することは欠くことのできない側面であろう。アスリート自身がどのように考え、感じていたかを調べることはスポーツ経験を明らかにする上で重要なことである。

また、近年では、エキスパートを対象とした研究などを含め、応用的な段階としての最高の状態に向けてのアプローチの必要性が叫ばれている。その競技者の良好な状態としては、Flow、Peak Experience (以下 PE)、Peak Performance (以下 PP) などの概念が代表的なものとして挙げられる。Flow は非常に集中しておりそれ自体が楽しい最適な心理状態、PE は自己実現を含む最も素晴らしかった経験、スポーツで最もよく用いられる PP はその競技者にとって最も良かった成績・パフォーマンスと定義される。

本研究では、競技者の主観的経験で良好な競技状態である Flow、PE、PP の3つの概念の中で Flow の概念を中心に上げる。スポーツにおける Flow の概念を研究する意義として、内発的動機づけの視点から Flow が何かをすること自体に価値がある経験であることが

挙げられる。もう1つの意義として、Flow の状態と良いパフォーマンスが結びついていることが挙げられる。先行研究で Flow の状態とパフォーマンスに正の相関があることが認められており、競技力の向上を目指す上で、Flow の状態やその直前の状態を調べることは、試合前にどのような心理的準備をすれば良いか、試合前・試合中にどのような心理状態になっていけば良いのかなどの有用な資料になると考える。

本研究では、調査的面接法と質問紙調査法の2つの研究方法を用いる。従来の先行研究より、面接技法はアスリートの主観的な経験を調べた Ravizza(1984)や Jackson(1993, 1996) などにおける質的研究でも用いられており、有用な方法であると判断された。質問紙法についても、Jackson & Csikszentmihalyi(1999) が述べているように、Flow が一度でも成し遂げられると、その体験は記憶の中に鮮やかに刻みつけられるとされ、また、実際に選手がインタビューされた結果、Flow の状態を“のりにのっている”“全部バッチリ”“きついけれど大丈夫”“理想的”“無敵”“流れる”“超絶好調”といったような普段とは異なる状態として記憶化しており、その状態を引き出すための質問紙法は Jackson &

Marsh(1996)や Jackson & Roberts(1992)など主観的な経験を量的な側面から調べた先行研究で用いられており、本研究でも質問紙法は有用な方法であると判断された。

本研究の目的は主に 4 つに分けられる。1 つ目は、よりスポーツの現場に則している Flow に関する日本人アスリートのデータを収集し、競技中の最高の心理状態の中身・内容を調べ、Csikszentmihalyi が提唱した Flow の 9 特性をスポーツにおける Flow にそのまま適用してよいのかを検証することである。また、Kimiecik & Stein (1992) が指摘しているように、レベルがあるとされている Flow において、低いレベルでも現れるような基本的な Flow 特性や、複雑で高いレベルでしか現れない Flow 特性など、それぞれのレベルに固有な特性があるのかを調べることによって、スポーツにおける Flow のより深い理解につながると考える。また、スポーツ現場においても、競技中の最高の状態を調べることは競技者が目指すべき状態という目標を明確にすることで動機付けを高めることができると考える。2 つ目は、Flow の状態と競技レベルや競技の種目特性などとの関係を調べることである。Ravizza (1977) は PE の条件として、基本的技能の遂行能力を挙げており、競技レベルが高ければ Flow を発現しやすいのか、競技レベルやスポーツの種類によって経験の質が変わってくるのか、また、瞬発的な種目と持久的な種目、チームスポーツであるかどうかなど競技の特性によって経験の質が変わってくるのかを検証することは Flow のより深い理解につながるであろう。3 つ目は、最高の状態に至るまでの先行条件の要素を調べることである。最高の状態から帰納的に調べら

れた系列的につながっている先行条件があれば、そこから Flow 状態へ演繹的にアプローチすることができ、先行条件が整っていれば Flow 状態になることができるのか、もしくは他に何か必要な要素があるのかなどを調べることによって Flow のさらなる深い理解へとつながるであろう。また、スポーツ現場においても、競技直前にどのような状態になればいいかという目標を明確にすることで動機付けを高めたり、選手が精神的コンディションを整える上でメンタルトレーニングなどの有用な資料になると考えられる。4 つ目は、Flow 構造を検討し、Jackson (1996) の述べた“高い Flow レベル=PE”という関係の図式などの先行研究と合わせ、Flow とその周辺概念の関係を明らかにすることである。1 つ目の目的とも絡んでくるが、それぞれのレベルに特有に現れる Flow 特性と、スポーツにおける PE、PP の先行研究で発見された要素との関係性を調べることで、要素レベルの観点から概念関係を検証していくことができると考えられ、現在、未だ曖昧に使われている Flow、PE、PP などの良好状態の概念を整理する上で有効な示唆を与えられると考える。

第一研究では 29 名のアスリートへのインタビューが行われ、その結果、競技中の状態は全データの 92.6%が Csikszentmihalyi の Flow 特性に分類された。また、本研究、Jackson の研究とも被調査者の言及率が高かった Flow 特性には「はっきりとした知覚的 feedback」「今この場の課題への集中」「それ自体が目的となる楽しい経験」が挙げられ、Flow の中心的な特性であると考えられた。逆に、「challenge と skill のバランス」「自意識の消失」「時間知覚の変容」への言及率は低

く、これらは高度で複雑な Flow 状態のときに現れる特性だと考えられた。競技直前の心理状態は、「リラックス」「自信」「意欲」「集中」「マイナス要因の欠如」「肯定的な感情」の 6 カテゴリーに分類された。このうち「リラックス」「自信」「意欲」には被調査者のほとんど全員が言及しており、最高の状態になるために不可欠な要素であると考えられた。

第二研究では高校生・大学生のスポーツ競技者 363 名に対し、競技中 152 項目・競技前 61 項目の質問紙調査が行われた。探索的因子分析の結果、競技中の状態は「高い効力感とはっきりとしたフィードバック」「動きの自動化」「自己コントロール感」「注意の集中」「自己超越感」「明確な目標の認知」「非日常性の認知」の 7 因子 67 項目、競技前の状態は「良好な心身のコンディション」「競技への集中」「社会的促進要因」「心理的負担の軽減」「参加への満足感」の 5 因子 26 項目が抽出された。また、分散分析の結果、競技中・競技前の状態とも差が見られ、概して競技年数が長いほど、競技レベルが高いほど因子得点が高い結果となった。

第三研究では高校生以上のスポーツ競技者 910 名に対し、競技中 71 項目・競技前 41 項目の質問紙調査が行われた。探索的因子分析の結果、競技中の状態は「動きの自動化」「注意の集中」「効力感」「自己超越感」「明確な目標の認知」「自己及び周辺を含む知覚変容」「コントロール感」の 7 因子 34 項目、競技前の状態は「レース・試合への心理的コンディショニング」「良好な心理的コンディション」「周囲の支援」「良好な身体的コンディションの認知」「平常心へのアプローチ」「参加への満足感」「リラックス」の 7 因子

31 項目が抽出された。また、分散分析の結果、競技中・競技前の状態とも差が見られ、概して競技年数が長いほど、競技レベルが高いほど因子得点が高い結果となった。

本研究では面接調査という質的・質問紙調査という量的な両側面から Flow を検証した。その結果、スポーツにおける Flow 状態は Csikszentmihalyi が提唱した Flow 状態にほぼ合致しているが、一部再考する必要がある結果となった。また、Flow 状態になるための準備条件として第一研究では「リラックス」「自信」「意欲」「集中」「マイナス要因の欠如」「肯定的な感情」、第二研究では「良好な心身のコンディション」「競技への集中」「社会的促進要因」「心理的負担の軽減」「参加への満足感」、第三研究では「レース・試合への心理的コンディショニング」「良好な心理的コンディション」「周囲の支援」「良好な身体的コンディションの認知」「平常心へのアプローチ」「参加への満足感」「リラックス」が挙げられた。3 つの研究で結果がバラバラになったため、競技直前の状態とそれまでの過程・アプローチ方法を明確に区別することが課題として残された。しかし、その内容は全体的に言えば、結果的にメンタルトレーニングなどが目指すものとほぼ合致していた。そして、競技中・競技前の状態とも、概して競技年数が長いほど、競技レベルが高いほど Flow 得点が高くなることが明らかとなった。さらに、Privette, Ravizza や Jacksonらの先行研究や本研究の結果から Flow、PE、PP などの心理的な最高状態を整理する上で有効なモデルが示された。

太極拳に関する精神生理学的研究 —「調心」・「調息」・「調身」について—

王 国譜 (中国・同济大学)

学位：博士(学術) 授与機関：奈良女子大学

取得日：2007年3月23日 指導教員：佐久間春夫教授

太極拳は中国の古典哲学である陰陽哲学、儒教、道教の理念、そして引導・吐納術および中国古典医学の経絡学などをもとに体系化された武術の一種である。そこでは理論の中心的な構成要素として「心」、「気」、「体」を据えている。心は「意識集中」、「雑念排除」、「動作に専念」すること、気は「自然呼吸」から「自然に動きと一体化した呼吸」となることが最終的な達成目標となっていること、体は「余分な力を使わず正しい姿勢」をとり、「意識をもってゆっくりした動作」をおこなうこと、最終的に「心」、「気」、「体」の調整を通して心身とも健康な状態へ導くことが期待されている。ところが、今まで「心」・「気」・「体」の調整に関する内包、「心静」、「呼吸自然」、「体松」に達する修得過程に関する研究は、経験知としての太極拳の「調心」、「調息」、「調身」についての有効性と健康的側面の効用に限られ知られている。それらに関する精神生理学的メカニズムについての研究、あるいは EBM: Evidence Based Medicine としてのいわゆる実証的データに基づいた知見はほとんど進められていない未開拓の領域といってよい。

本研究は、心身健康法としての太極拳に注目し、太極拳理論における歴史的検討をふま

えて精神生理学的研究の必要性を導き出し、太極拳の構成要素である「心」・「気」・「体」に内包される「調心」・「調息」・「調身」の調整過程における精神生理学的メカニズムに関する知見を得ることを目的とする。

以下に、本研究で得られた主な知見をまとめ総括を行った。

第1章では、本研究の動機と研究目的について述べるとともに、太極拳に関するこれまでの実証的研究の分類を試みた。最大酸素摂取量や心拍数、主観的運動強度などからとらえた健康体操としての運動負荷論的研究、精神科等における治療的側面から見た太極拳に関する医学的研究、自己概念の改善や抑鬱感の解消といった心理学的研究、および普及度や愛好者の動態調査といった社会学的研究等に分類し、概括している。

太極拳各流派によって運動強度が異なることが分かった。それぞれが演舞の特徴である姿勢の違いからくる重心の位置や、移動距離の相違による負荷の違いを反映したものであるが、健康運動といった側面からの運動強度としては 24 式や楊式太極拳が適していると考えられる。

継続的な実践がもたらす影響については、心血管系機能や、免疫能力、体力などの面に

において、太極拳の継続に伴い、生理学的な変化をもたらす健康効果が得られることは、それぞれの実験結果から明らかになった。さらに、太極拳の継続に伴う健康効果については、初心者より熟練者の方が大きいと考えられる。

太極拳の呼吸効果について、有酸素能力が高められ、心肺機能の向上とエネルギー消費の効率化などの先行研究から、太極拳の呼吸に関する医学的な健康効果や試合のパフォーマンスに影響を与えられていることなどの臨床的な応用が示されている。自信の増強、心理状態の改善などの心理学的効果が得られるものと考えられる。

以上、数多くの研究および実践体験から高血圧の予防と治療、心血管系機能の増強、転倒防止の効果などが期待されているが、太極拳に関する研究では、緩やかな動作、姿勢のコントロール及び呼吸のコントロールといった運動の特徴をクローズ・アップして精神生理学的視点から生理学的・心理学的な変容をもたらす実証データに基づいた知見は皆無と言っても過言ではない。

第2章では、太極拳の史的背景について触れた後、今日の太極拳の普及をもたらした重要な要因の一つである“健康”のための実践手段に関する科学的根拠について検討した。

1) 太極拳は陳王廷に創始されたが、その後依拠する理論の違いによっていくつかの流派に派生して発展し、今日では陳派、楊派、武派、吳派、孫派が主な伝統流派として受け継がれている。これらの門派を伝統流派と呼ぶのに対し、のちに伝統流派の套路(型)を簡略化し、さらに複数の門派の套路を融合することにより新たな套路として生み出した制定拳があ

る。太極拳が今日の健康運動として位置づけられるまで五つの転機(①陳王廷が太極拳を創始、②陳家溝の陳氏十四世陳長興が、異姓の楊露禪を弟子入り。③楊露禪が貴族を対象に健康づくりへ転向、都を中心に伝播。④武禹襄をはじめ、書物によって太極拳が更に全国各地に普及。⑤中華人民共和国の建国後、制定拳の制作により世界へ)を経て形成されたと考えられる。2) 太極拳の思想的柱となっている「無極」・「無」・「悟」の思想についてそれぞれの解釈と検討を行った。「無極」は万物(他者・環境など)が変化し続けることにより、自己もそれに応じて変化し続ける必要がある。「無」は平常心を持ち、雑念を排除し、心を安寧に保つことであり、意を以て太極拳を練り、練っていくことで「無心」になり、「静心」になることを意味する。「悟」とは、一つは「無極」および「無」の状態でいる心の「悟」であり、もう一つは、動き、姿勢および呼吸を調整する過程を通して「悟」ことである。太極拳の健康思想の中核をなす「無極」・「無」・「悟」の理念と太極拳理論の中心的な構成要素である「心」・「気」・「体」の意味について述べてから「調心」「調息」「調身」との関連について検討を行っている。

第3章では、太極拳における「調心」「調息」「調身」の含意について検討し、三者の調和が心身の自己調整を意味するものとして捉え、精神生理学的視点からの検証方法について取り上げている。即ち、「調心」と「調息」については脳波の各周波数帯域分布、心電図解析による自律神経系機能分析、心理指標の状態不安測定から、「調身」については筋電図学的な特徴から、それぞれとらえることができることを示している。

後半の第4-7章では、太極拳の習熟度及び修得度による「調心」、太極拳式呼吸と他の腹式呼吸との比較結果から得た特徴を検証した太極拳の「調息」、自己暗示で「調身」の精神生理学的効果について、実証的な検討を行った。

第4章では、太極拳の学習過程における精神運動的要因をとらえるために、習熟度の異なる者を対象に、心身の自己調整・自己コントロール能力の特徴について調べた。太極拳の実施が、状態不安の低減、脳波 α 帯域の含有率相対変化量の増加から習熟者と初級者との類似性とそれぞれの特徴が明らかにされた。習熟者は、状態不安の持続的な低減を示し、 α 2帯域の含有率の持続的な優勢傾向などより、脳波的特徴・心理的な主観評価ともに両群に質的な違いの在ることが示唆された(図1)。即ち、初級者においては、太極拳と一般的な運動実施後とに上記指標の結果の違いが見られないのに対し、熟練者においては太極拳固有の特徴と思われる結果が得られ、“爽快でスッキリした感じ”が生み出されたことを反映するものであった。

第5章では、「調心」について、太極拳諸流派の中でも代表的な簡化24式および競技楊式の熟練者を対象に、二つの行法の特徴について調べた。太極拳の実施後、両行法においては状態不安の持続的な低下傾向がみられたが、競技楊式群において終了後30分での α 2帯域の含有率相対変化量の増加がみられ、さらに脳波と状態不安との相関から、状況即応的な適度の覚醒状態にあることが見いだされた。これらの結果は行法の違いに基づくばかりでなく、修得度の違いをも反映しており、修得度による精神的コントロール能力の向上

を示す結果であると指摘している。

第6章では、「調息」について、自然呼吸法、順腹式呼吸法、逆腹式呼吸法、太極拳式呼吸法について精神生理学的な観点から比較し、太極拳式呼吸法のもつ意味について検討を行った。一方、日常生活において健康づくりに太極拳を取り入れている健常者を対象に、太極拳式呼吸の遂行に伴う生理指標と心理指標との関連性について検討を行い、下記の結果を得た。

実施前、太極拳式呼吸時、終了後30分時の脳波については、各時間条件間の各帯域の脳波含有率に有意な差が見られなかったが、傾向としては α 2帯域の含有率が優勢であった。自律神経系機能においては、CVRR、HF/LF ≥ 1 の出現頻度、心拍、血圧の指標から、太極拳式呼吸が自律神経系機能の良好な状態を保つ働きを示す結果が得られた。以上のことから、太極拳式呼吸の実施により、状態不安が低下し自律神経系の側面からも心理的ストレスを減少させることが示された。また、出現脳波の特徴から、太極拳の継続者は、太極拳の修得により太極拳式呼吸が日常生活においても慣習化されていることを示す結果が得られた。太極拳式呼吸は動きと一体化したものであり、吐く場合には積極的な体勢をつくり、最大の瞬発力を発揮し、有効な技をかけようとする挙法であったことに帰因すると述べている。

第7章では、太極拳の「調身」の精神生理学的背景をみるために、太極拳における基本姿勢であり、「意を用いる」即ち自己暗示によって作り出される脱力姿勢を取り上げ、自然姿勢との比較から検討を行った。(表1)。

太極拳では、演武前の基本姿勢を調整する

ことから始まり、演武中の伸びやかな姿勢と緩徐な動きが円滑に行われるために、動きを生み出す内面の過程にも注意を払い、自己調整・自己コントロールの下で行われる「調身」も重要な調整過程である。

太極拳の「調身」の精神生理学的背景を明らかにするために、太極拳遂行時の姿勢の調整を基に姿勢コントロールを手段として、太極拳の特有姿勢を保つ筋の弛緩した脱力姿勢の特徴について、さらに最も多用される姿勢の静的伸張性筋収縮保持姿勢の機序について下記の結果を得た。①太極拳の「調身」過程にみられる筋の弛緩した状態である脱力姿勢の筋放電量は、外見上は類似した自然姿勢と比べ有意に少ないことが見いだされた。②脳波帯域からは、自然姿勢と比べ、脱力姿勢では $\alpha 1$ 帯域の出現量は、有意に少なく $\alpha 2$ 帯域の出現量は、有意に多かった。そこでは脳波 $\alpha 2$ 帯域の増加とそれに対応した感情面との関連に基づき、さらに筋電図から演武中に多用される静的伸張性筋収縮保持姿勢の生理学的機序から、太極拳が自律訓練法と同様に自己コントロール能力を高める運動療法として、臨床的場面への適用可能性をもつものであることを明らかにしている。

第8章では結章として、第1章から3章での太極拳の健康思想について概括した結果明らかにされた修得過程における「調心」「調息」「調身」の精神生理学的意義について、第4章から7章での実験で得られた知見に基づいて考察している。そこでは、太極拳が、からだどこころの内面への気づき(awareness)と洞察による自己調整能力を高め、その結果としての情緒の安定という心身の状態が得られるメカニズムについて言及し

ている。さらに、太極拳の修得結果として、太極拳理論で究極の到達目標されている「心静」「体松」「呼吸自然」の境地に至るものであると述べ、本論文の結論としている。また、残された検討課題として、本研究が心身の健康法として一つの動的な技法としての背景となるメカニズムの探求で終わり、治療といった応用場面への方略についての検討が残されていることをあげている。

付記：本論文の作成にあたり、指導教官として長年に渡りご指導を賜りました奈良女子大学の佐久間春夫教授、ならびに数々の貴重なご指導を下さいました多くの方々へ心よりお礼申し上げます。

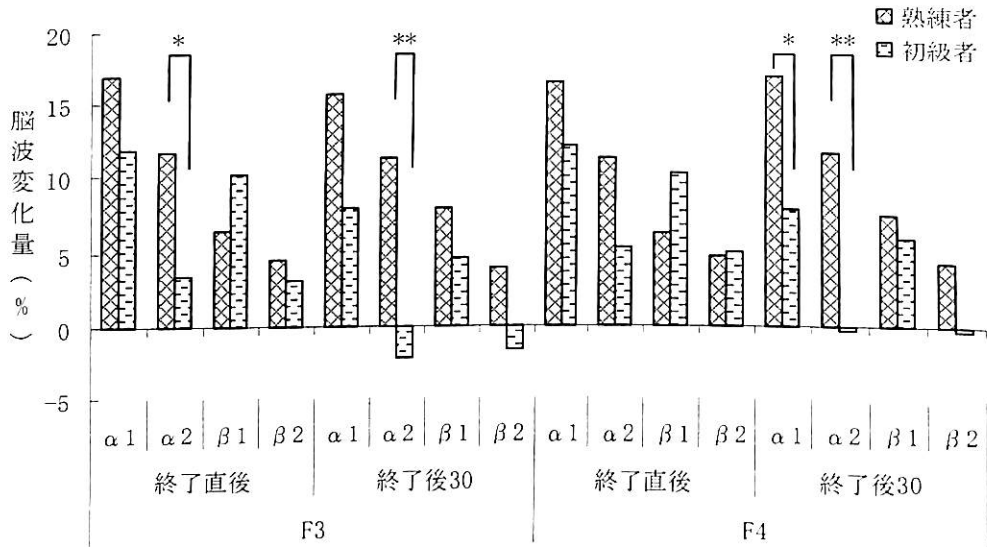


図1 前頭部における群別の脳波帯域についての比較(*: p < 0.05, **: p < 0.01)

表1 部位, 条件別にα1帯域, α2帯域脳波の変化

部位	MとSD	自然姿勢	脱力	F
α1帯域				
Fz	M	14.78	6.14	
	SD	8.83	4.4	
Cz	M	18.7	9.45	
	SD	12.67	6.94	
Pz	M	43.46	24.43	14.69
	SD	32.07	18.2	p < 0.01**
Oz	M	100.93	55.86	69.95
	SD	71	33.35	p < 0.01**
α2帯域				
Fz	M	5.59	9.5	
	SD	3.87	7.76	
Cz	M	7.44	13.82	
	SD	4.29	9.35	
Pz	M	17.57	45.04	22.65
	SD	12.42	32.77	p < 0.01**
Oz	M	30.45	101.82	156.01
	SD	22.98	72.39	p < 0.01**

VI. 海外情報

ライデン大学滞在記

清水 安夫（桜美林大学健康福祉学群）

2006年9月から2007年の9月までの1年間、オランダのライデン大学（Universiteit Leiden）に在外研究員として滞在した。

日本では馴染みの薄いオランダの大学であるが、実は日本との関係は深く、明治政府下において近代日本の礎を築いた西周、榎本武揚、津田真道をはじめ、多くの学者や技術者が学んだ大学である。また、日本に西欧医学を伝えたシーボルトがオランダに帰国後、晩年を過ごした街でもあり、日本史の教科書でお馴染みの人物が頻出するため、日本人としてのアイデンティティが呼び起こされる街である。とりわけ、江戸幕府の鎖国政策下において、唯一のヨーロッパとの玄関口であったこともあり、我が国との交流も古い。ライデン大学では、1855年に日本学科が設立され、現在でもヨーロッパにおける日本関係の研究拠点があり、EU諸国をはじめ世界中から日本研究者が集まって来ている。大学や街全体に親日的な雰囲気が漂っているのも、このような歴史的な背景が影響しているからかもしれない。

ライデン大学は、1575年にライデン市がスペインからの独立を勝ち取った際に創設された国内最古の大学である。スペインからの独立戦争に、長期に渡り耐え凌いだ市民を称え、当時、ホラント州・ゼーラント州の総督であったオラニエ公ヴィレム1世が、「税制の優遇」もしくは「大学の設立」を提案した。これに対して、市民が大学の設立を希望しことに端を発する。減税は短期的には市民の生活を潤すが、大学は永続的に国家の礎となる人



ライデン大学本部(蘭:Academiegebouw)

材を育成するという判断から、当時のライデン市民の長期的展望と英知が感じられる。このような設立経緯からも、民主的で自主独立の気風が強い大学である。事実、幅広く気鋭の学者を受け入れてきた伝統があり、ルネ・デカルト、ヘルマン・ブールハーフェ、ヨハン・ホイジンガなど、体育学や医学の入門書に出てくる学者なども教鞭を取っていた点でも興味深い。

筆者自身は、School of Social & Behavioral Science（社会科学・行動科学）の学部にて在籍し、Stan Maes 教授の下、健康心理学・運動心理学をテーマにした研究を拝聴させていただいた。オランダの大学は、日本型、アメリカ型の高等教育システムともかなり異なるため、制度上・システム上の相違についての理解することは、1年間という短い時間では、ついに出来なかった。ここでは、中でも、滞在中、特に印象深く思った点を2点について紹介させていただく。

まず、第一に、博士課程のシステムである。オランダの大学では、博士課程在籍者の身分は、有給の研究者扱いであるという点である。

彼らの主な仕事は、博士論文を書くための自分の研究と学部・修士の学生の論文指導である。勤務日数によって給料は変わるが、概ね生活には困らない給料が3年間の在籍期間中には保障されるため、生活の心配なく研究に没頭できる。また、3年間の教育経験を持つため、学位取得後、大学等の教育現場にて、即戦力として仕事に従事できる利点がある。次世代の教育者・研究者の養成を巧みに大学院教育に組み込むところなど、合理主義社会の為せる技と印象的であった。

第二は、大学での評価制度についてである。学生及び教員評価が実に合理的に行われていることが印象的であった。余談になるが、中世以降、オランダ国内でも、繁栄を極めたアムステルダム、ライデン、デン・ハーグ、ユトレヒト、マーストリヒトなどの都市には、必ず街の中心に De Waag (計量所) の建物が存在し、現在でも重要文化財として大切に保存されている (写真)。かつて不毛なヨーロッパの僻地に、海運業によって世界の海を席捲する大国を作り上げた所以が、この De Waag に見て取れる。つまり、正確な指標に基づく取引によって、インチキな商売を無くす。その公正な計測システム作りによって、ヨーロッパはもとより、世界中から良質な物資や多くの商人が集うようになり、街や国家が繁栄したのである。この極当然のシステムが、大学の伝統の中にも生きている。

具体的には、心理学で言えば、正確なアセスメント指標の作成に心理学者は心血を注ぎ、教育で言えば、学生に対する公正な教育評価の実施、研究者に対する研究・業績評価の実施である。実際、学生評価や教員評価の際、アドミニストレーターは非常に気を使い、可能な限りの公正さを保つために、明確な評価

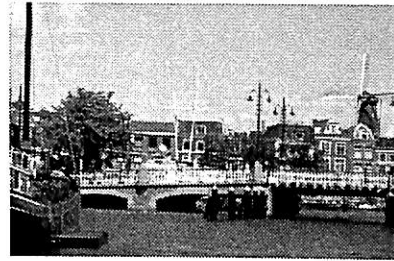
基準を設けて査定を行っている。例えば、論文評価に対しては、impact factor を基準として査定を行っているのも、その一例である。国際競争の激しいヨーロッパでは、研究者が流動的であり、優秀な教育者・研究者を大学が確保するためには、明確な評価基準を設けて査定を行い、被雇用者の満足感を高めなければ、人は離れて行く。一流大学が、高い教育水準と研究水準を維持することが、いかに困難なことかを伺い知ることができた。筆者の在籍中も、博士の学位を取得したばかりの将来有望な研究者が、在留せずにカナダの大学に引き抜かれ、指導教授が大変失望していた。給与面では、北米の大学に敵わないヨーロッパの大学の苦しい胸の内を垣間見る機会ともなった。

ライデン大学の行動科学領域の研究の特徴は、医療現場との連携が密接なことである。Health & Clinical Psychology のデータメントが設置されている校舎は、医学部やメディカルセンターと隣接しており、医師と行動科学者が共同で患者のサポートを行っている。また、同時に院生のトレーニングの場としても活用しているため、医療と行動科学が上手に教育システムを構築し、疾病予防やリハビリテーションのプログラムを機能的に提供している。特に、ヘルスプロモーションに関するテーマは重視されており、日本では運動心理学領域の研究者が展開している、行動変容理論を用いた身体活動量増加プログラムも積極的に導入されている。オランダでも、生活習慣病は重大な問題であり、過去に医療保険の財源が払底した経験がある国だけに、予防プログラムの展開は盛んに実施されていた。

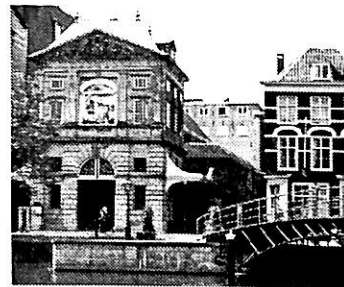
オランダ人の平均身長は、世界で最も高いことは有名だが、概して肥満の人が少ない。

その一つの理由として、国の政策が大きく関わっていると言う。例えば、自転車通勤者には税制の優遇措置を設け、また、高速道路を除く国内すべての道路に自転車専用道路を整備するなど、国家が積極的にインフラ整備を行い、国民の身体活動量の増進と社会環境の保全を支援している。郊外に出れば、森林や湖など、多くの自然を満喫しながらサイクリングが出来るため、人々は、必然的に自転車での通勤・通学を選び、レジャーとしてのサイクリングを楽しむようになる。このように、人間の意思決定や行動を環境整備によってコントロールしようという様々な仕掛けが、都市工学・人間工学・行動科学の連携の下、ダイナミックに展開されている。オランダ人の合理主義的伝統が社会政策に反映された、一つの成功モデルとして大変興味深い。

オランダにおける教育や教育のシステムを見ていると、我々個人が、常に当たり前だと思っていることが、現実的にシステムティックに機能するまでには、長い時間と努力が必要なのだということを痛感させられる。ヨーロッパ近代史における多くの争乱の中、ドイツやフランスなどの大国に挟まれ、なお存続している小国家の底力。産業革命以降の大学の近代化において、多くの伝統ある名門大学が輝きを失う中、旧体制から脱却を図り、時流に乗ることに成功したライデン大学。日本では、2008年より学士課程にもFDが義務化され、各大学は改革を迫られる。教育や評価システムが見つめ直される中、大学組織・学問領域の将来について、様々な思いを巡らせる時間を与えていただいたオランダでの滞在であった。

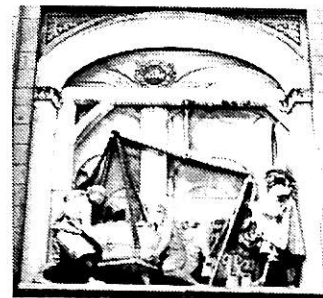


街のシンボルの風車(De Valk)と運河



ライデンの計量所

(蘭: De Waag, 英: The Weigh House)



ライデンの計量所

計量所正面の浮彫(バター計量の様子)



Breestraat の自転車専用道路

(正面の塔は市役所)

VII. 事務局報告

平成 18 年度事業報告（平成 17 年総会～平成 18 年総会）

日本体育学会第 57 回大会関連（於：弘前大学）

1. プレセミナー

日 時 平成 18 年 8 月 17 日（木） 15：00～17：00
会 場 総合教育棟 301 号室
テーマ 動いている人間の中身を知ること（志向分析）
司 会 阿江 美恵子（東京女子体育大学）
演 者 佐藤 徹（北海道教育大学）
指定討論者 栗木 一博（仙台大学）

2. 一般研究発表

口頭発表（総合教育棟 301 号室）

ポスター発表（第 1 体育館）

日 時 平成 18 年 8 月 18 日（金）～20 日（日）
発表数 68 題（口頭発表 12 題、ポスター発表 56 題）
（備考：平成 10 年度 46 題、平成 11 年度 54 題、平成 12 年度 44 題、
平成 13 年度 49 題、平成 14 年度 45 題、平成 15 年度 56 題、平成 16
年度 58 題、平成 17 年度 89 題）

3. キーノートレクチャー 1

日 時 平成 18 年 8 月 18 日（金） 13：00～13：50
会 場 総合教育棟 301 号室
テーマ 身体障害者の自己の再構築に果たす運動・スポーツの役割
司 会 吉川 政夫（東海大学）
演 者 内田 若希（九州大学大学院芸術工学研究院・日本学術振興会
特別研究員）

4. キーノートレクチャー 2

日 時 平成 18 年 8 月 18 日（金） 14：00～14：50
会 場 総合教育棟 301 号室
テーマ スポーツ選手が語りそして表現する「身体」の治療的意味
司 会 井上 則子（津田塾大学）
演 者 中込 四郎（筑波大学）

5. シンポジウム

日 時 平成 18 年 8 月 19 日（土） 10：10～12：10
会 場 総合教育棟 301 号室
テーマ 体育・スポーツ・健康教育におけるポジティブサイコロジーの視点
司 会 橋本 公雄（九州大学健康科学センター）
演 者 堤 俊彦（近畿福祉大学）
健康心理学の視点からみたポジティブサイコロジー
小橋川 久光（琉球大学名誉教授）
体育・スポーツ領域におけるフロー研究の立場から
宮城 政也（沖縄県立看護大学）
ヘルスプロモーションにおける楽観主義の視点について

6. 理事会 平成 18 年 8 月 18 日（金） 11：40～12：40 総合教育棟 301 号室

7. 総 会 平成 18 年 8 月 19 日（土） 12：10～13：00 総合教育棟 301 号室

平成18年度体育心理学専門分科会総会議事録

日時：平成18年8月19日（土）午前12：10－13：00

場所：弘前大学（総合教育棟301号室）

1. 開会の辞

吉川理事より、総会を開催する旨の開会の辞があった。

2. 会長挨拶

総会に先立ち、杉原会長から会員が661名で8名増、また体育学会全体では会員が大幅に減少している中での増加はうれしいことであった、また専門分科会では、発表数が2位であり、会員の人数の割合から見ると研究活動が活発に行われている等が報告された。しかし、学会への理事が一人も出ていない。私は監事にはなっているが、専門分科会としては、理事を送り込みたい、さらに健康福祉専門分科会が認められたなど新しい動向がある旨の挨拶がなされた。

3. 議長選出

総会議長に山田秀樹先生（北海道東海大学）を選出し、議事に入った。

4. 報告事項

1) 平成18年度事業報告について

西田理事長から以下の報告がなされた。

(1) 日本体育学会第57回大会(弘前大学)における専門分科会活動について

大会では、プレセミナー、キーノートレクチャー2題、シンポジウム、一般研究発表(68題；口頭発表12題、ポスター発表56題)が行われた。大会に先立って開催されたプレセミナー(企画委員会が企画運営)では、阿江理事を司会に、佐藤徹先生(北海道教育大学)に講演いただいた。指定討論者は栗木一博先生(仙台大学)をお願いした。

(2) 体育心理学専門分科会会報の発行(広報委員会、事務局)

第18号(通巻第46号)を7月31日付で発行した旨の報告があった。

(3) 次期役員の選挙を実施した件、理事会運営の件、庶務および会計業務(庶務・会計委員会、事務局)の件について報告された。

2) 理事会の開催について

西田理事長から平成18年8月18日に理事会が開催されたことが報告された。

3) その他

(1) 吉川理事より、名誉会員として藤田厚先生を推薦したと報告された。

丹羽劭昭先生は、奈良支部から推薦があったので、専門分科会からの推薦は行わなかった旨の報告があった。

(2) 徳永先生より、体育学会総会に関する報告がなされた。

第57回大会の一般研究発表の申し込み総数は490題で昨年よりも減少、来年は神戸大学にて体育学会を開催予定、新しい専門分科会が承認されたこと、学会のジャーナルに関する留意点について説明がなされた。また、第59回大会は早稲田大学、第60回大会は広島支部で開催予定であること、体育心理学専門分科会からは理事が選出されなかった等が報告された。

5. 審議事項

1) 次期専門分科会役員（会長、理事、監事）の選出について

吉川理事より、下記の資料1に基づき、次期役員の選挙結果の報告がされた。事務局から2名を理事として推挙する。また、事務局から幹事1名を推挙する。監事については後日、会員の中から会長が委嘱する。それらについて審議があり、承認された。

<資料1>

体育心理学専門分科会次期役員の選挙結果について

○体育心理学専門分科会会則第6条による次期役員の選挙（事務局担当）

○任期：平成19年4月1日～平成21年3月31日（2年間）

○投票締め切り：平成18年4月21日

○有効投票数81票（投票率12.4%）

○開票結果（敬称略、得票順）

会長：猪俣公宏

理事：中込四郎、吉田茂、石井源信、伊藤政展、荒木雅信、

吉川政夫、佐久間春夫、土屋裕睦、竹中晃二、鈴木 壮

事務局選出理事：谷口幸一、高妻容一

幹事：松本秀夫

2) 平成18年度決算について

吉川理事(庶務・会計委員会)から、資料2(巻末に掲載)に基づき平成18年度決算報告がされた。決算報告について、楠本監事より監査報告があり、承認された。

3) 平成 19 年度事業計画について

西田理事長から以下の提案と説明がなされ、承認された。

(1) 日本体育学会第 58 回大会における企画運営（学会大会委員会）について

神戸大学にて開催（平成 19 年 9 月 5 日～7 日）

一般研究発表（口頭・ポスター）、シンポジウム、キーノートレクチャー、理事会、総会を行う。

来年の 4 月から役員が交代するため、新理事会が企画運営をする。

(2) プレセミナーの開催（企画委員会）について

学会会員の中から著名な方を招待してプレセミナーを行う方向で企画をしたい。

(3) 体育心理学専門分科会「会報」第 19 号（通巻第 47 号）の発行（広報委員会、事務局）について

4) 平成 19 年度予算案について

吉川理事(庶務・会計委員会)から、資料 3 (巻末に掲載)に基づき平成 19 年度予算案の提案があり、承認された。

5) その他

特になし

6. 議長退席：議長より終了が宣言された。

7. 閉会の辞：吉川理事より総会の閉会の辞があった。

平成 18 年度体育心理学専門分科会理事会議事録

理事会の開催

日本体育学会第 57 回大会開催期間中に、弘前大学にて理事会が開催された。議事録は以下の通りである。

平成 18 年度 体育心理専門分科会 第 1 回理事会

日時：平成 18 年 8 月 18 日（金） 11：40－12：40

場所：弘前大学 総合教育棟 301 号室

出席者：杉原隆（会長）、西田保（理事長）、橋本公雄、石井源信、阿江美恵子、

山本裕二、伊藤政展、中込四郎、吉川政夫、谷口幸一、（以上理事）

高妻容一、松本（以上幹事）

欠席者：工藤孝幾、岡沢祥訓、伊藤豊彦（以上理事）、楠本恭久、矢野宏光（以上監事）

杉原会長から開会にあたっての挨拶がなされた。

報告事項

1. 平成18年度事業報告1：次期役員選挙結果について

吉川理事より体育心理学専門分科会次期役員選挙結果について、資料（総会資料1参照）に基づいて報告がされた。西田理事長からこの選挙結果は、総会での審議事項とする旨の提案があり了承された。

2. 平成18年度事業報告2：各委員会活動について

(1) 学会大会委員会：山本委員長より特になしと報告された。

(2) 企画委員会：阿江理事より、北海道教育大学の佐藤徹先生による講演、指定討論者：粟木一博先生、司会：阿江美恵子で実施した旨、また「懇親会を設けて欲しかった」等の意見が参加者からあったことが報告された。

(3) 広報委員会：中込委員長から「特になし」と報告された。

(4) 庶務・会計委員会：吉川委員長より、体育心理学専門分科会の会員数が前年度よりも8名増加し、現在661名の会員数であること、また名誉会員として藤田厚先生を推薦したことが報告された。なお、名誉会員の推薦に関して、丹羽勲昭先生は、奈良支部から推薦があったので、専門分科会からの推薦は行わなかったとの報告があった。

3. 事務局報告

吉川理事より、上記(4)の内容を事務局報告とすると報告された。

4. その他

特になし

審議事項

1. 学会大会関連の謝金について（学会大会委員会）

山本学会大会委員長より、資料に基づいて体育心理学専門分科会謝金の申し合わせ（案）が提案された。その提案に関して、シンポジウムとキーノートレクチャーの演者の謝金と交通費について議論があった。また会員外の演者とは、体育学会会員以外という意味であ

り、名目を企画費に変更ということで承認された。

その結果、本大会（弘前大学）のシンポジウムの演者である、会員外の小橋川久光先生に対して、企画費（謝金2万円、交通費補助として3万円）を支払うこととした。

なお、体育心理学専門分科会謝金の申し合わせは以下の通りである。

1) シンポジウムとキーノートレクチャーの演者

会員の場合 謝金1万円 交通費なし

会員外の場合 企画費（謝金2万円、交通費は3万円を限度に実費）

2) シンポジウムの指定討論者

会員の場合 謝金5千円 交通費なし

会員外の場合 企画費（謝金1万円、交通費は3万円を限度に実費）

3) シンポジウムの司会

会員のみ 謝金5千円 交通費なし

4) キーノートレクチャーの司会

会員のみ 謝金なし 交通費なし

*プレセミナーはシンポジウムに準ずる。

2. 研究会活動に対する支援について（庶務・会計委員会）

吉川庶務・会計委員会委員長より、予算の繰り越し金額が90万円前後あるため、研究会活動を支援するために使ったらどうかとの具体的な提案が出された。それに対して、支援金をもらうと手かせ足かせになるので具合が悪い、自由に活動したい（阿江理事）、支援金を出すより、大会特別企画で外部から人を呼ぶのに10万円くらいの単位で使ったほうが有益である（山本理事）、研究会の構成メンバー、趣旨、活動の申告などをしないと出せない（杉原会長）などの意見が出され、研究会活動に対する支援は見送られた。

3. 平成18年度決算について（庶務・会計委員会）

吉川理事より、巻末の資料2の通りの報告がされ、了承された。

4. 平成19年度事業計画について（各委員長）

学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会より下記のような報告あ

るいは提案があった。

1) 学会大会委員会

学会大会企画は例年通り。もし資金があれば、早めに企画が組めるのではないかなどの案が出たが、結論には至らなかった。

2) 企画委員会

プレセミナーだけではなく、別な企画も考えたい。しかし、負担が大きい。フレセミナーだけでなく他の企画をすればなどの案が出たが、結局は「引継ぎをよろしく」ということであった。

3) 広報委員会

記録を残し、会員の動向を確認する案が出たが、結論には至らなかった。

4) 庶務・会計委員会

研究会活動への補助はしない。体育心理学専門分科会のHPを作る案が提案され、前向きに検討することになった。会費（現在年額千円）の値上げについて提案されたが、専門分科会活動をして行き、足りないから値上げならいいが、などの意見が出、今回は承認されなかった。

5. 平成 19 年度予算案について（庶務・会計委員会）

吉川庶務・会計委員会委員長より、巻末の資料 3 の通り提案され、承認された。

6. 総会の開催について（理事長）

西田理事長から以下の提案がなされ、承認された。

1) 司会および議長の選出

司会は事務局の吉川理事が行う。議長はフロアから案が出ない場合、山田秀樹先生（北海道東海大学）に依頼する。

2) 総会次第（総会資料参照）

(1) 報告事項

平成 17 年度事業報告、理事会において決定された件に関する報告は西田理事長がまとめて行う。事務局の吉川理事より名誉会員推薦の件を報告する。

(2) 審議事項

次期専門分科会役員（会長、理事、監事）の選出について、平成 18 年度決算、平成 19

年度予算案についての提案は吉川理事(庶務・会計委員会)が行う。

平成 19 年度事業計画については西田理事長が提案する。

7. その他

特になし

<議長：西田理事長 議事録：高妻・松本幹事>

平成18年度決算報告

<資料2>

平成18年度決算報告(自 平成17年度総会 至 平成18年度総会)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		737,024	833,964	△ 96,940
前期繰越収支差額		956,008	956,008	0
収入合計(B)		1,693,032	1,789,972	△ 96,940
支出の部				
当期支出合計(C)		1,693,032	904,582	788,450
次期繰越収支差額(B) - (C)		0	885,390	△ 885,390
支出合計		1,693,032	1,789,972	△ 96,940

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・前年度繰越金		956,008	956,008	0	
・年会費		600,000	644,000	△ 44,000	1千円×644名 ※会員数661名(納入率97.4%)
・郵便貯金(利息)		24	24	0	
・体育学会専門分科会補助金		137,000	137,700	△ 700	
・役員選挙実施費用補助金		0	52,240	△ 52,240	80円×653名分
○収入合計(B)		1,693,032	1,789,972	△ 96,940	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	説明
・分科会会報関連費用	小計	600,000	513,065	86,935	
	印刷費		274,975		750部印刷
	郵送料		113,090		648部発送
	原稿料(特別寄稿等)		80,000		0.5万×12名,1万×2名
	原稿料(研究会活動報告)		20,000		0.5万×4名
	謝礼(会報発行作業補助)			25,000	
・シンポジウム等関連経費	小計	250,000	210,000	40,000	
	謝礼(演者・司会)		70,000		1万×7名
	謝礼(傍聴記・参加記等寄稿者)		110,000		0.5万×22名
	専門分科会懇親会補助		0		開催なし
	謝礼(写真撮影)		10,000		
	シンポジウム打ち合わせ補助			20,000	
・役員選挙実施費用	郵送料・選挙実施補助謝礼等	0	98,513	△ 98,513	
・事務局事務費	封筒印刷費等	100,000	32,014	67,986	
・通信費	会員・理事連絡費	80,000	50,990	29,010	プレセミナーの案内郵送料 80円×634名・他
・当期支出合計(C)		1,030,000	904,582	125,418	
・予備費(B)-(C)		663,032	885,390	△ 222,358	
○支出合計		1,693,032	1,789,972	△ 96,940	

△は超過

*会員数昨年度653名から661名へと8名増

平成18年8月15日

この決算書は適正であることを認めます。

幹事 楠本 恭久

矢野 宏光

平成19年度予算案

<資料3>

平成19年度予算案(自 平成18年度総会 至 平成19年度総会)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・前年度繰越金		956,008	885,390	70,618	
・年度会費		644,000	640,000	4,000	1千円×640名
・郵便貯金(利息)		24	24	0	
・体育学会専門分科会補助金		137,700	138,000	△ 300	
・役員選挙実施費用補助金		52,240		52,240	選挙なし
・当期収入合計(A)		833,964	778,024	55,940	
○収入合計(B)		1,789,972	1,663,414	126,558	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	説明
・分科会会報関連費用	印刷費,郵送料,会報作成補助費等	513,065	550,000	△ 36,935	
・シンポジウム等関連経費	小計 ・謝礼 (演者,司会,会報原稿協力者等) ・専門分科会懇親会補助 ・シンポジウム打ち合わせ補助等	210,000	250,000	△ 40,000	
・役員選挙実施費用		98,513		98,513	
・事務局事務費	文具,印刷費,発送業務・資料整理等	32,014	50,000	△ 3,760	
・通信費	会員・分科会役員連絡費等	50,990	50,000	990	
・当期支出合計(C)		904,582	900,000	4,582	
・予備費(B)-(C)		885,390	763,414	121,976	
○支出合計		1,789,972	1,663,414	126,558	

△は超過

編集後記

体育心理学専門分科会会報（第 19 号：通巻第 47 号）をお届けします。

諸般の事情で発行が大幅に遅れましたことをお詫びいたします。本号の内容は、特別寄稿、第 57 回大会関連、研究会活動、研究室紹介、学位論文紹介、海外情報、事務局報告などです。ずいぶん前に寄稿頂いた方々、また急な依頼にもかかわらず執筆頂いた方々、ご協力誠にありがとうございました。

新規広報委員会は神戸の学会時に発足いたしました。どうぞよろしく申し上げます。毎号の記事は活動の再確認と新しい発見があり、面白く楽しみにしておりました。このたび図らずも広報担当となり、戸惑うこともあります。会員諸氏のご協力を頂きよりよいものにしていきたいと考えております。

広報としては、この会報と合わせてホームページを開設すべく準備しております。会員には学会活動の情報をいち早くお知らせするため、そして会員相互の情報交換の場の提供のため、また広く一般にも成果を公開するためです。できるだけ早く運用できるよう進めますので、しばらくお待ち下さい。

国立情報学研究所の学協会情報発信サービスを利用予定。具体的には、体育学会ページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspe3/>) から、「リンク」、「体育心理学専門分科会」でたどるようにします。

広報委員会委員長 吉田 茂

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第 19 号（通巻第 47 号）

発行 平成 20 年 2 月 15 日 発行（非売品）
発行責任者 吉川 政夫（代表）
発行所 日本体育学会体育心理学専門分科会事務局
〒259-1292 平塚市北金目 1117 番地
東海大学体育学部生涯スポーツ学科 吉川研究室内
TEL：0463-58-1211 内線 3586（研究室）
FAX：0463-50-2056（学部事務室）
印刷 東海大学事務部印刷業務課
TEL：0463-58-1211
